



京都府京田辺市

南山遺跡発掘調査報告書

—三山木越前地内宅地造成に伴う発掘調査—

2010

京田辺市教育委員会

南山遺跡発掘調査報告書

—三山木越前地内宅地造成に伴う発掘調査—

2010

京田辺市教育委員会



調査地全景（東から）



調査地遠景 (南から)



調査地遠景 (西から)



重複する縦穴住居跡（南東から）

序

京田辺市の南部は、近年大きな変貌をとげています。近鉄・JRの三山木駅を中心とした地域では区画整理事業、その南西丘陵部では大規模宅地造成事業がそれぞれ進行しています。今回報告する南山遺跡はこの2つの事業地に挟まれた低丘陵上を中心に立地する遺跡で、宅地造成にともなって発掘調査を実施したものです。

調査により、円形あるいは方形の縦穴住居跡が多数みつき、今から約2,000年前の弥生時代中ごろのムラだったことがわかりました。ことに方形のものは、時期的にこのあたりには数少ないものでその特異性が注目されます。

最後になりましたが、今回の調査にあたりまして、事業関係の方々、関係機関をはじめ多くの方々のご協力・ご指導を賜りました。あらためてお礼申し上げるとともに、今後とも埋蔵文化財へのご理解を賜りますようお願い申し上げます。

平成22年6月

京田辺市教育委員会

教育長 村田 新之昇

例 言

1. 本書は、京田辺市三山木越前9番地ほかにおける宅地造成工事に伴う南山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 現地調査及び整理報告は、京田辺市教育委員会・橋本不動産株式会社・特定非営利活動法人文化財支援センターの三者で覚書を締結して実施した。
3. 現地調査は平成21年1月13日に開始し同年5月1日に終了した。
4. 調査体制は以下のとおりである。

調査主体……京田辺市教育委員会

調査指導機関……京都府教育委員会・京田辺市文化財保護委員会

調査担当者……京田辺市教育委員会 教育部 社会教育課 鷹野一太郎

調査担当技術員……特定非営利活動法人文化財支援センター 仲道裕・大橋裕子

発掘調査作業……有限会社スペース・バリュー

計測技師……吉岡真史・小林雅幸・内川博之

整理作業……日下部悦子・澤口結希・竹内千津（石器実測）

5. 調査を実施するについて、橋本不動産株式会社に多大なるご協力とご支援を賜った。ここに記して感謝の意を表します。
6. 調査期間中及び本書を作成するにあたり、以下の方々からご教示を得ることができた。ここに記して感謝の意とします。（順不同・敬称略）

森岡秀人（芦屋市教育委員会）、伊藤淳史（京都大学文化財総合研究センター）、若林邦彦（同志社大学）、國下多美樹（向日市埋蔵文化財センター）、藤井整（京都府教育委員会）、肥後宏幸（京都府埋蔵文化財調査研究センター）、石黒立人（愛知県埋蔵文化財センター）、千喜良淳

7. 本書で使用した遺跡の名称は『京都府田辺町遺跡地図』（田辺町教育委員会 1995）にしたがった。本書第2図で使用した地図は国土地理院1：25000地形図「田辺」を編集して使用した。
8. 遺跡および遺構の位置は世界測地座標系により示した。標高は海拔標高（T.P.）である。
9. 出土遺物のうち、板状鉄斧については保存処理及び自然科学的分析を行った。
10. 出土遺物及び図面・写真は京田辺市教育委員会で保管している。
11. 本書の執筆は、1・2・3（1）・5を鷹野、3（2）・4（1）（2）（3）・5を仲道、4（4）を大橋が行い、附篇「南山遺跡出土板状鉄斧の自然科学的調査」を財団法人元興寺文化財研究所塚本敏夫・山岡奈美枝・山田哲也、九州テクノリサーチ・TACセンター大澤正己・鈴木瑞穂、名古屋大学年代測定総合研究センター中村敏夫の各氏に報文を賜った。本書の編集は鷹野の指導の下、仲道・大橋が行った。

本文目次

1. はじめに	1
2. 位置と環境	2
3. 調査の経過	5
(1) 試掘調査	5
(2) 本調査	5
4. 調査の概要	7
(1) 調査の方法	7
(2) 基本層位	7
(3) 遺構	10
(4) 遺物	34
5. まとめ	53
附篇 南山遺跡出土板状鉄斧の自然科学的調査	
財団法人元興寺文化財研究所 塚本敏夫・山岡奈美枝・山田哲也 九州テクノリサーチ・TACセンター 大澤正己・鈴木瑞穂 名古屋大学年代測定総合研究センター 中村敏夫	56

挿図目次

巻頭図版1 調査地全景(東から)	
巻頭図版2 上 調査地遠景(南から)	
下 調査地遠景(西から)	
巻頭図版3 重複する縦穴住居跡(南東から)	
第1図 調査地位置図	1
第2図 主要遺跡図	3
第3図 周辺地形図	4
第4図 調査前風景(西から)	5
第5図 調査風景(北から)	5
第6図 現地説明会風景	5
第7図 校外学習	6
第8図 調査区設定図	6
第9図 調査区地区割図	7
第10図 2トレンチ東壁	7
第11図 トレンチ東壁断面図	8
第12図 2トレンチ南・西壁断面図	9
第13図 1トレンチ全景(南から)	10
第14図 2トレンチ全景(西から)	10
第15図 遺構配置図	11・12
第16図 板状鉄斧出土状況	13
第17図 SH01遺物出土状況(西から)	13
第18図 SH01遺物出土状況(南から)	13
第19図 SH01平・断面図	14
第20図 SH01完掘状況(南から)	15
第21図 SH02平・断面図	15
第22図 SH02完掘状況(南から)	16
第23図 SH03平・断面図	16
第24図 SH14平・断面図	17
第25図 SH03・14完掘状況(東から)	17
第26図 B群完掘状況(西から)	17
第27図 SH06平・断面図	18
第28図 SH05平・断面図	18
第29図 SH04平・断面図	19
第30図 SH08平面図	19
第31図 C群完掘状況(北から)	20
第32図 SH09平・断面図	20
第33図 SH09石礫出土状況	20
第34図 SH10スクレイパー出土状況	20

第35図	SH09完掘状況（北から）	21	第72図	SH01出土遺物（1）	37
第36図	SH10遺物出土状況	21	第73図	SH01出土遺物（2）	37
第37図	SH15平面図	21	第74図	SH01出土遺物（3）	37
第38図	SH10平・断面図	22	第75図	SH01出土遺物（4）	38
第39図	SH16平面図	22	第76図	SH01出土遺物（5）	38
第40図	D群完掘状況（東から）	23	第77図	SH01出土遺物（6）	38
第41図	SH11・17平・断面図	23	第78図	遺物実測図（3）	39
第42図	SH13平面図	24	第79図	SH01出土遺物（7）	39
第43図	SH07平・断面図	24	第80図	SH01出土遺物（8）	40
第44図	SB01完掘状況（西から）	25	第81図	SH01出土遺物（9）	40
第45図	SB01平・断面図	25	第82図	SH01出土遺物（10）	40
第46図	SB02完掘状況（西から）	26	第83図	遺物実測図（4）	41
第47図	SB02平・断面図	26	第84図	土器群出土遺物	41
第48図	SB03平・断面図	27	第85図	遺物実測図（5）	42
第49図	SB04平・断面図	27	第86図	SK1473・1377出土遺物	42
第50図	SB04完掘状況（北から）	28	第87図	SK1356出土遺物	43
第51図	SK1377遺物出土状況	28	第88図	遺物実測図（6）	44
第52図	SK1473壺蓋出土状況	28	第89図	SK1356他出土遺物	45
第53図	SX1385平面図	29	第90図	遺物実測図（7）	46
第54図	SX1385完掘状況（南から）	29	第91図	遺物実測図（8）	47
第55図	SH04完掘状況（南から）	29	第92図	出土石器（1）	48
第56図	PI285遺物出土状況（南から）	29	第93図	出土石器（2）	48
第57図	SH10完掘状況（西から）	29	第94図	出土石器（3）	48
第58図	SB03完掘状況（東から）	29	第95図	遺物実測図（9）	49
第59図	SH12平・断面図	31	第96図	出土石器（4）	49
第60図	SH12完掘状況（南から）	31	第97図	遺物実測図（10）	49
第61図	SB05完掘状況（西から）	31	第98図	板状鉄斧	49
第62図	SB05平・断面図	32	第99図	庄内・布留期の遺物	50
第63図	SK1316完掘状況（南から）	32	第100図	遺物実測図（11）	50
第64図	SB05のPI540遺物出土状況（南から）	33	第101図	遺物実測図（12）	51
第65図	SK1316遺物出土状況（南から）	33	第102図	須石器杯蓋	51
第66図	SK1314遺物出土状況（東から）	33	第103図	土師器高杯	51
第67図	SX1400遺物出土状況（南から）	33	第104図	遺物実測図（13）	51
第68図	焼成坑検出状況（南から）	33	第105図	SX1400出土遺物	51
第69図	遺物実測図（1）	34	第106図	遺物実測図（14）	52
第70図	SH10出土遺物	34	第107図	銭貨拓影	52
第71図	遺物実測図（2）	36			

表 目 次

表1 縦穴住居跡法量

表2 建物跡法量

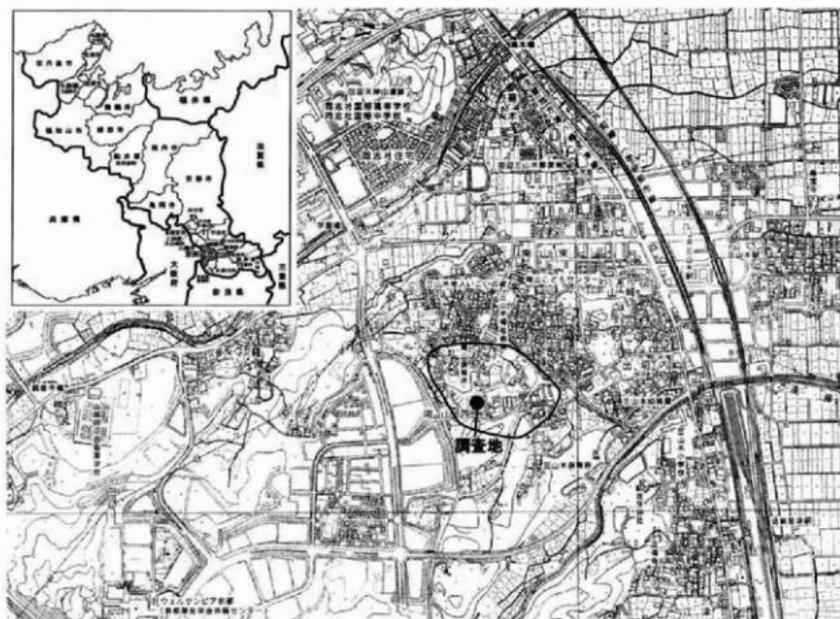
1. はじめに

南山遺跡は京都府京田辺市^{みやまきこしほ}三山木越前を中心に広がる弥生時代の土器散布地として知られている。遺跡は、水田面から一段高い低丘陵上に存在するが、近年の宅地開発は、これまで手つかずにおかれた丘陵部にもおよび、市内の景観は刻一刻と変化してきている。

橋本不動産株式会社では、越前地区の丘陵上での宅地造成を計画され、平成20年7月1日付で文化財保護法第93条第1項に基づく届出をされた。これを受け、京田辺市教育委員会では、事業者の協力の下、平成20年10月2・3日に試掘確認調査を行ったところ、弥生時代の土器片のほか、柱穴・弥生時代の土器を含む土域状の落込みなどがみつかったため、切土部分を対象とした発掘調査が必要と判断し、事業者と発掘調査についての協議を行った。

発掘調査の現地作業は平成21年1月13日から開始し、同年5月1日に終了した。その後、整理作業を文化財支援センター桃山整理室で行った。

なお、事業者である橋本不動産株式会社の方々をはじめ、関係機関・地元住民の方々、また極寒・降雪・雨天のなかにおいても作業に従事された皆さん、その他多くの方々の協力によって今回の調査を実施することができた。記して感謝の気持ちとしたい。



第1図 調査地位位置図 (S=1:15,000)

2. 位置と環境

京田辺市は、京都府南部に広がる南山城平野のほぼ中央部、伊賀山中に源を発する木津川左岸に位置し、北は京都府八幡市、東は木津川を挟んで城陽市・井手町、南は相楽郡精華町、西は大阪府枚方市・奈良県生駒市と接している。市の西部は、生駒山系に連なる甘南備丘陵で、東部は北流する木津川によって形成された沖積平野が広がっている南北に長い市である。砂礫層の多い大阪層群からなる西部の丘陵地は起伏が著しく、丘陵から流れ出る小河川が開析谷・扇状地を形成している。また、小河川の多くは平野部において、人為的な改修も手伝い、人家の屋根より川床が高い天井川という独特の景観を作り出した。

南山遺跡は、京田辺市南部の生駒山系から連なる北東に伸びる丘陵平坦部の南側を中心に展開する遺跡である。普賢寺川を挟んで北側の丘陵地には同志社校地が広がる。

周辺の歴史的環境をみると、縄紋時代ではJR三山木駅周辺に広がる三山木遺跡から晩期の土器がみつき、山崎神社には古くから著名な石棒が伝わっている。弥生時代では三山木遺跡から前期中葉の土器がみつき、南山城でも早い段階に成立した集落とみられ、中期前半にかけて展開し、碧玉製管玉生産が行われていたことも判明している。宮ノ下遺跡からは前期の土坑群、宮ノ口遺跡から前期の土坑がみつまっている。中期では、調査地北方700mの大切遺跡から中期後半の溝や方形周溝墓がみつまっている。後期では、調査地北300mの田辺天神山遺跡が南山城を代表する高地性集落として著名である。そこでは、縦穴住居跡が20棟以上みつき、不整形円形→円形→方形へとプランの変遷がみられる。また東方にある独立丘陵の飯岡では縦穴住居跡や方形周溝墓がみられる。

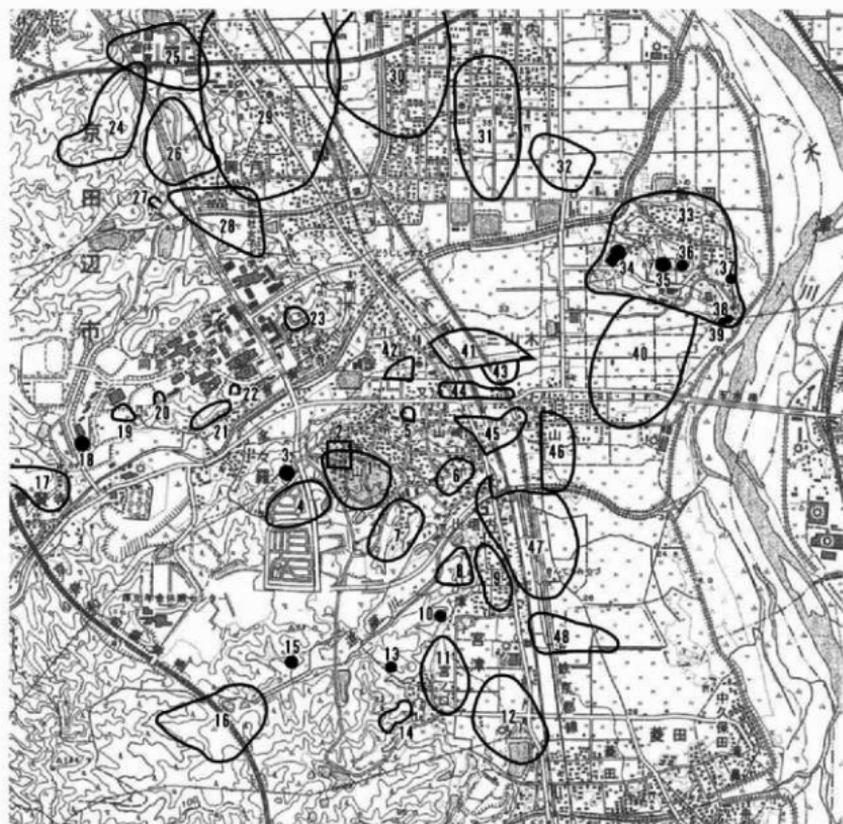
古墳時代では同じ飯岡で前期の飯岡車塚古墳（前方後円墳・90m）や中期の薬師山古墳・ゴロゴロ山古墳・トツカ古墳（ともに円墳）、後期の東原古墳、飯岡横穴などが点在する。三山木山崎には横穴式石室の山崎2号墳、同志社校地内には終末期の下司古墳群、調査地の西方300mには後期の口駒ヶ谷古墳などがある。

『日本書紀』によると西暦511年、継体天皇が筒城宮に遷都したことが記されている。宮の場所については諸説あるが、地名が都谷であるところから、昭和3年（1928）普賢寺川沿いに建立された石碑が、現在は同志社大学の正門西側に移設されている。

飛鳥時代後期には三山木廃寺、普賢寺が創建され、ことに普賢寺には奈良時代の国宝十一面観音立像が伝わっている。奈良時代では三山木駅周辺に、『続日本紀』和銅4年（711）の条にみえる山陽道の山本駅が想定されているが、考古学的には確定されていない。二又遺跡からは、駅の機能を引き継いだと考えられる平安時代初めの掘立柱建物跡群や井戸が墨書土器や緑釉陶器などとともみつき、三山木遺跡では、山陽道に規制された地割の奈良時代の溝が2条みつまっている。

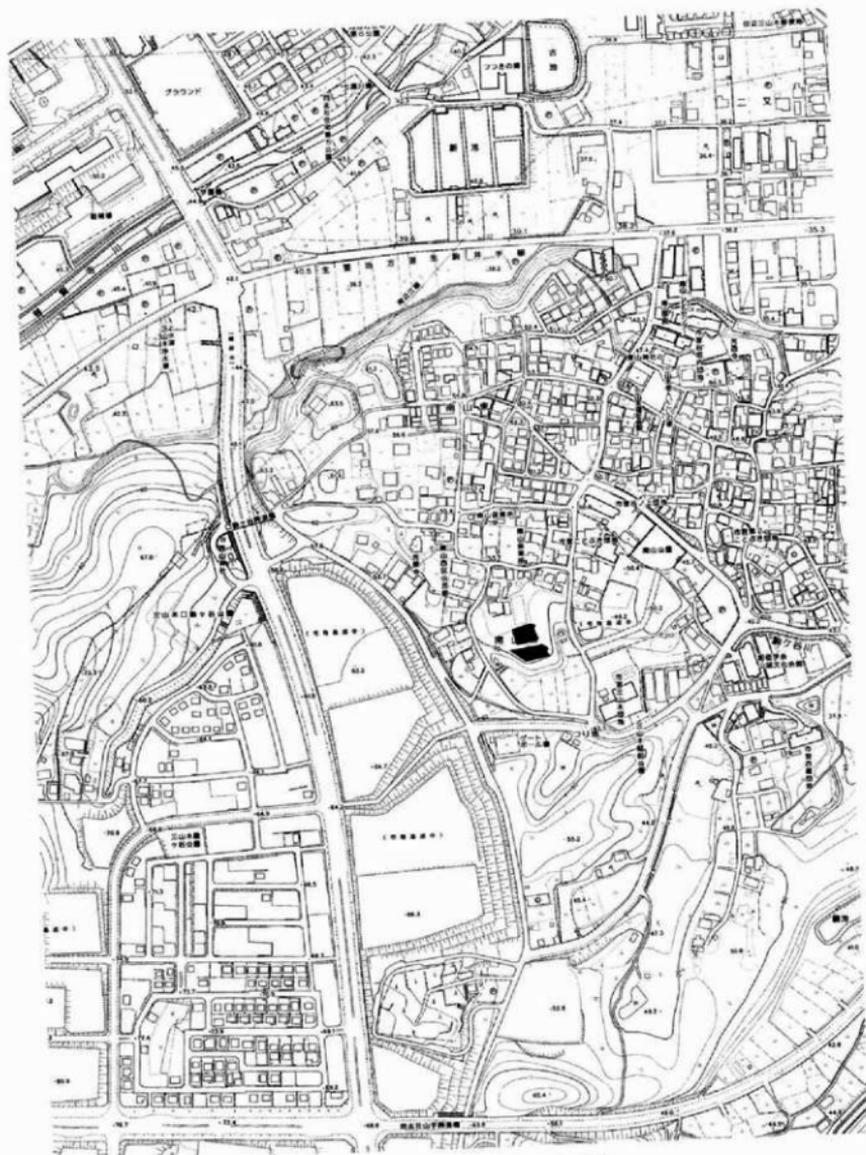
中世では調査地すぐ西側の口駒ヶ谷遺跡で室町時代の城館跡、すぐ北側の南山城跡で戦国時代の遺物がみつまっている。宮ノ口遺跡からは、鎌倉時代の掘立柱建物跡や池などがみつまっている。

今回の調査地は、丘陵平坦地から谷となる南側に舌状に張り出した地点で、東側・西側とも小さな谷が入り込んでいる。南側には谷水田があり、さらに南はまた丘陵地となる。この谷部はかつては川が流れ、魚も遡上してきたということである。



- | | | | |
|--------------|------------|-----------------|----------|
| 1 南山遺跡 | 13 宮津古墳 | 25 田辺遺跡 | 37 トヅカ古墳 |
| 2 南山城跡 | 14 宮ノ口古墳群 | 26 興戸古墳群・興戸丘陵道跡 | 38 横穴古墳 |
| 3 口駒ヶ谷古墳 | 15 葛藤谷古墳 | 27 興戸宮ノ前遺跡 | 39 横穴古墳 |
| 4 口駒ヶ谷道跡 | 16 奥山田池遺跡 | 28 興戸宮ノ前遺跡 | 40 古屋敷道跡 |
| 5 上谷浦道跡 | 17 香賀寺跡 | 29 興戸道跡 | 41 田中東道跡 |
| 6 山崎古墳群・山崎道跡 | 18 大御堂堂山古墳 | 30 大切道跡 | 42 田中西道跡 |
| 7 西羅道跡 | 19 下河古墳群 | 31 南畑内道跡 | 43 東角田道跡 |
| 8 三山木庵寺跡 | 20 まむし谷道跡 | 32 宮ノ後道跡 | 44 二又道跡 |
| 9 佐牙垣内道跡 | 21 新宗谷館跡 | 33 飯岡道跡 | 45 三山木道跡 |
| 10 江津古墳 | 22 新宗谷館跡 | 34 飯岡車塚古墳 | 46 直田道跡 |
| 11 屋敷田道跡 | 23 田辺天神山道跡 | 35 ゴロゴロ山古墳 | 47 宮ノ下道跡 |
| 12 宮ノ口道跡 | 24 田辺城跡 | 36 業師山古墳 | 48 桑町道跡 |

第2図 主要遺跡図 (S=1:25,000)



第3図 周辺地形図 (S=1:5,000)

3. 調査の経過

(1) 試掘調査

調査は丘陵頂部の平坦地中央に、南北方向のトレンチを2か所設定し行った。

北側トレンチでは、地山面で直径0.2~0.4mを測る柱穴状のピットを、地山のすぐ上には弥生時代の土器を多く含む遺物包含層を確認した。南側トレンチでは、北から南に傾斜が下がり、埋土に弥生土器を多く含む土域状の落込みを確認した。

このため、開発計画地内の丘陵部一帯に弥生時代を中心とした遺跡が広がっているものと考えられ、切土による造成計画である丘陵頂部の平坦面の発掘調査が必要であると判断された。

(2) 本調査

調査は1月13日より開始した。計画では1トレンチから重機による表土掘削を行う予定であったが、竹林の伐採箇所には不十分な部分が認められたため2トレンチの表土掘削を先行させ、その間に竹林の伐採を行い、2トレンチ終了後に1トレンチの表土を掘削した。

1月29日に2トレンチの遺構検出が終了し、縦穴住居跡、ピット群が検出された。

同日、遺構の広がりかトレンチの東西に認められたため調査範囲の拡張が検討され、1トレンチでも同様のことが起こりうするため、そちらの遺構検出を待って再度検討することになった。

2月10日に1トレンチの遺構検出が終了した。トレンチ西側は後世の開削によって削平されていたが、北と東側へは比較的保存状態が良好な遺構の広がりが確認された。

2月19日に調査範囲拡張の協議が現地で行われ、三者協議による決着が付き、ようやく3月17日に重機による拡張を行った。



第4図 調査前風景 (西から)



第5図 調査風景 (北から)



第6図 現地説明会風景

この間に柱穴などの比較的小型の遺構の調査を行っていった。その結果、これまで包含層などから出土する遺物が弥生土器を中心としていたため、その存在に気付いていなかったが、古墳時代後期の遺構が点在することが判明した。住居跡の掘削を始めたのが3月26日である。調査を進めていくにつれ住居跡の重複がますます複雑となり

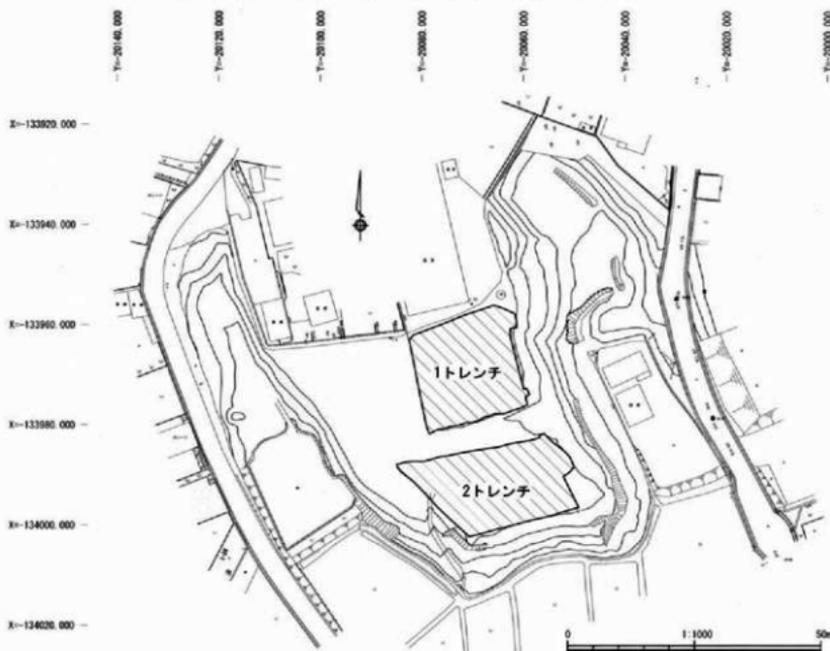


第7図 校外学習

切り合い関係を明確にしながら慎重に掘削を行い、一応の形が整い、4月16日に記者発表を行い、翌17日にラジオコントロールヘリによる空中写真の撮影を行った。ただし住居跡03は現地説明会を開催した際に定番となっている「どうしてそこに遺構がわかるのか」という質問に答えるため空中撮影後の調査とし掘削を行わずにした。

翌18日の午後に現地説明会を開催し、約200人の来場があり盛況の内に終了した。

24日に三山木小学校6年生児童の校外授業が行われた。すべての調査を終えたのは4月30日で、翌5月1日の調査資器材の撤収を行い現地での調査を終了した。



第8図 調査区設定図 (S=1:1,000)

4. 調査の概要

(1) 調査の方法

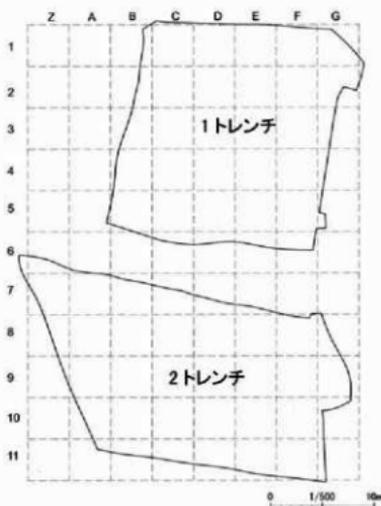
事業地はもともと竹林であり、地区内のほぼ中央に東西の作業道が設けられていた。その部分については、後世の土取りなどの削平が行われていて遺構の存在はないと判断された。そのためこの作業道を境に北を1トレンチ、南を2トレンチとして調査区を設定した。

調査は遺物包含層の上面までを重機による掘削を行い、包含層からは人力によって行った。また、重機による掘削が終了した時点で、4mごとの小グリッドを設け各グリッドで遺物の取り上げを行った。

(2) 基本層位

基本層位は1トレンチと2トレンチでは地形的制約から相違がみられる。大きな違

いは、2トレンチでは竹林の盛り土が見られるのに対し、1トレンチでは見出すことができなかった。一方、茶畑の層は両トレンチで確認が取れた。おそらく、中央の作業道を掘削した際に掘られた土で2トレンチ側に盛り土がなされた結果と推定する。したがって、第3層オリーブ黒色土が茶畑であったころの表土と考えられる。遺構は、第5層にぶい黄褐色土上面で検出できるが、茶畑の混じりがあるため検出面を若干掘り下げて遺構検出を行った。この層は2トレンチの南側では斜面となるため検出することがなく、第4層オリーブ褐色粗砂質土上面が遺構面となる。遺構検出までの深さは1トレンチ北端で約30cm、2トレンチ南端で約80cmである。



第9図 調査区地区割図



第10図 2トレンチ東壁

1 トレンチ 東壁



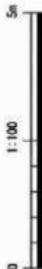
- 1層 5Y4/2 灰白色土(10786/8 明褐色粘土上2層、炭化物0%含む) (表土)
- 2層 2.5Y3/2 明褐色粘質土(10785/6 明褐色粘土上2層、炭化物0%含む) (表土)
- 3層 5Y3/2 オリーブ褐色土(φ3cm程度の礫1%含む) (樹山)
- 4層 2.5Y4/4 オリーブ褐色無砂質土(φ5cm程度の礫40%含む) (樹山)
- 5層 10Y85/4 におい黄褐色土(樹山)
- 36層 灰層(10Y80/6 明黄褐色粘質土1%含む) (泥乱)
- 37層 10Y3/2 黒褐色粘質土(φ1cm程度の礫1%含む) (泥乱)
- 38層 10Y3/2 黒褐色土(φ2cm程度の礫1%含む) (表土)
- 39層 2.5Y4/3 オリーブ褐色土(φ2cm程度の礫1%含む)
- 40層 10Y32/3 明褐色土 (SK1356)
- 41層 2.5Y4/2 暗緑色土 (SH101)
- 42層 7.5Y3/7 黒褐色粘質土(炭化物1%含む) (SK1403)
- 43層 10Y8/4 褐色粘質土(10Y85/6 黄褐色粘土上1層、φ1cm程度の礫1%炭化物1%含む)
- 44層 5Y3/1 オリーブ褐色土(10Y75/6 黄褐色粘土上1層、炭化物0%含む) (SH14)
- 45層 2.5Y3/2 暗褐色粘質土(10Y85/8 明褐色粘土上2層、炭化物0%含む) (SH14-PL15)
- 46層 7.5Y3/1 暗褐色粘質土 (SH14-PL15)
- 47層 5Y3/4 オリーブ色土(φ2cm程度の礫1%含む)
- 48層 2.5Y4/2 暗黄褐色土
- 49層 2.5Y4/2 オリーブ褐色土(炭化物1%含む) (SK1402)
- 50層 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土(φ3cm程度の礫3%、炭1%含む) (SK1403)
- 51層 2.5Y4/2 暗黄褐色粘質土(φ2cm程度の礫1%含む) (SK1403)
- 52層 2.5Y3/2 暗褐色粘質土(炭化物1%含む) (SK1403-PL4)
- 53層 10Y84/2 灰黄褐色粘質土(炭化物1%含む) (SK1404)
- 54層 10Y75/3 におい黄褐色土 (SK1403-PL21)
- 55層 2.5Y4/2 明黄褐色土 (Pl1339)
- 56層 10Y84/3 におい黄褐色土 (SK1369)
- 57層 10Y84/6 褐色土(φ1cm程度の礫2%含む) (SK1404)
- 67層 10Y84/3 におい黄褐色粘質土 (SH14古)
- 68層 10Y73/4 暗褐色土(φ1cm程度の礫1%含む) (SD01)

2 トレンチ 東壁

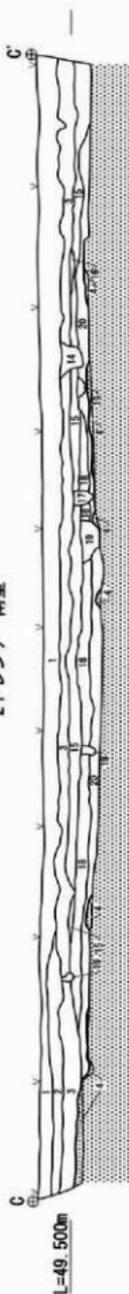


- 6層 7.5Y3/6 におい褐色無砂質土(φ5cm程度の礫1%含む) (樹山)
- 7層 2.5Y5/4 黄褐色土
- 8層 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土(φ3-6cm程度の礫1%含む)
- 9層 10Y85/6 黄褐色粘質土(φ2cm程度の礫1%含む)
- 10層 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質土
- 11層 2.5Y5/4 におい黄褐色土
- 12層 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土(土状)
- 13層 2.5Y4/2 暗黄褐色粘質土 (SK1405)
- 58層 2.5Y4/2 暗黄褐色土(φ2cm程度の礫1%含む、炭化物1%含む) (SH100)
- 59層 5Y3/2 オリーブ褐色粘質土(5Y7/2 灰白色粘土1%含む) (土状)
- 60層 10Y84/6 褐色砂質土 (樹山)
- 61層 2.5Y3/1 暗褐色粘質土(炭化物20%含む) (SH101-SK7)
- 62層 2.5Y3/4 褐色土 (SH110)
- 63層 2.5Y3/1 オリーブ褐色土(炭化物1%含む) (SH10明細溝)
- 64層 10Y8/2 灰黄褐色粘質土(φ1cm程度の礫1%、炭化物1%含む) (SH15)
- 65層 2.5Y3/2 暗褐色土 (SK1464)
- 66層 2.5Y5/3 黄褐色粘質土 (SH16)

第11図 トレンチ東壁断面図



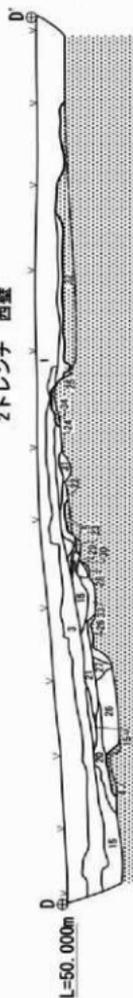
2トレンチ南壁



- 14層 10YR3/1 暗褐色土(φ2cm程度の礫1%含む)
 15層 2.5Y4/2 明灰黄色土(2.5Y6/4 におい黄色粘質土1%、φ2cm程度の礫1%含む)
 16層 5Y2/2 灰オリーブ色土(2.5Y6/6 明黄褐色粘質土2%、灰化物1%含む)
 17層 5Y4/4 暗オリーブ色土(φ3cm程度の礫2%含む)

- 18層 5Y4/3 暗オリーブ色土(φ3cm程度の礫2%含む)
 19層 2.5Y5/4 黄褐色土(φ5cm程度の礫1%含む)
 20層 2.5Y5/4 黄褐色土(φ2cm程度の礫2%、灰化物1%含む)

2トレンチ西壁



- 21層 2.5Y4/3 オリーブ褐色土(φ3cm程度の礫1%含む)
 22層 2.5Y4/4 オリーブ褐色土(φ2cm程度の礫1%、10YR5/6 黄褐色粘質土10%、灰化物1%含む)
 23層 2.5Y4/3 オリーブ褐色土(φ1cm程度の礫1%、2.5Y3/1 原褐色土10%含む)
 24層 5Y4/2 灰オリーブ色土(10YR5/4 におい、黄褐色粘質土10%含む)
 25層 竹笹
 26層 黄褐色砂礫 (SK20163)
 27層 2.5Y5/4 黄褐色土(7.5YR5/6 明黄褐色粘質土1%、φ2cm程度の礫1%含む)

- 28層 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土(灰化物1%含む)
 29層 2.5Y4/4 オリーブ褐色土(灰化物1%含む)
 30層 砂層
 31層 10YR5/8 黄褐色粘質土 (752100)
 32層 5YR/1 灰白色粘土
 (10YR6/8 明黄褐色シルト混じり粘土も含む) (奥山)
 33層 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土(φ1cm程度の礫2%含む) (SK20133)
 34層 10YR6/8 明黄褐色粘質土(φ2cm程度の礫1%含む) (奥山)



第12図 2トレンチ南・西壁断面図

(3) 遺 構



第13図 1 トレンチ全景 (南から)



第14図 2 トレンチ全景 (西から)

Y=20050.000

Y=20060.000

Y=20070.000

Y=20080.000

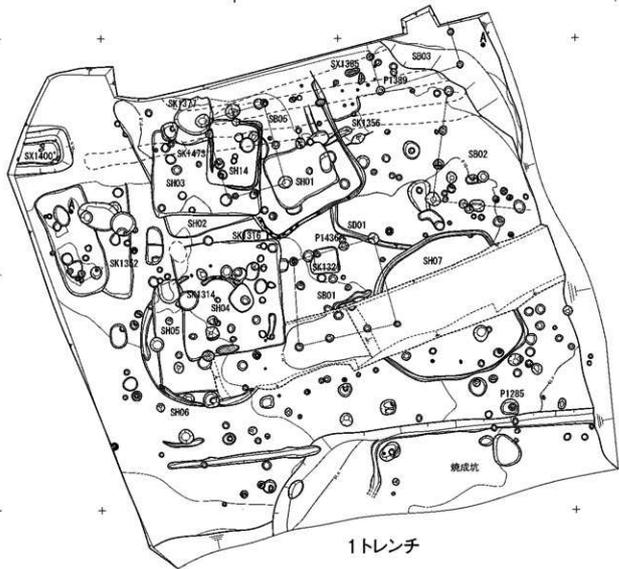
X=133960.000

X=133970.000

X=133980.000

X=133990.000

X=134000.000



1トレンチ

Y=20050.000

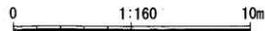
Y=20060.000

Y=20070.000

Y=20080.000



2トレンチ



第15図 遺構配置図

X=133960.000

X=133970.000

X=133980.000

X=133990.000

X=134000.000

遺構は弥生時代中期後半の遺構が中心で縦穴住居跡16棟、掘立柱建物跡（この後は建物跡と略す）4棟、溝1条、野外地床跡1基、土坑4基、ビット368を確認した。この他に庄内期の縦穴住居跡1棟、古墳時代前期の掘立柱建物1棟、同後期の土坑3基、近世の土坑1基、近代の焼成坑をそれぞれ検出した。

（弥生時代中期後半）

縦穴住居跡は合計16棟検出したが、そのほとんどが重複して検出され、便宜上A～Dの四群とした。重複関係はそれぞれA群がSH01・02・03・14、B群がSH04・05・06、C群はSH08・09・10・15・16、D群はSH11・17である。なお、主柱穴は調査期間中にはほとんどの住居跡で確認が取れたため、遺構実測についても現場においてエレベーション等を設定した。

A群

SH01は東側が斜面にかかっているため一部流出している。A群では最終段階に建てられたと考える。法量は東西推定5.9×南北5.2mの長方形をしていて、床面までの残存深度は12.4cmで、南東側の周壁溝に地床跡と思われる焼土を検出している。主柱穴はP.6・14・20を想定したが、残る北東側の一は土壌によって攪乱されていた。調査を進めていき、床面の検出の段階で遺構内の中央西側で床面を検出できない

南北2.7m、東西2.2mの方形の掘り方を検出した。深さ17cmあり、いわゆるベッド状遺構の1段さがった所と考えられる。主柱穴の径は0.3mで床面からの深さは0.1m、柱間の距離は4.15×3.4mで方位はN28°Eの長軸を東西に取る。周壁溝は西と東、北側の一部で検出し、幅約0.14m、深さ約0.05mである。壁柱穴が西側と北側に9基見られる。出土遺物は壺、甕、鉢、高杯、水差、石鏃、敲石があり、特殊な遺物として板状片刃鉄斧があり、全



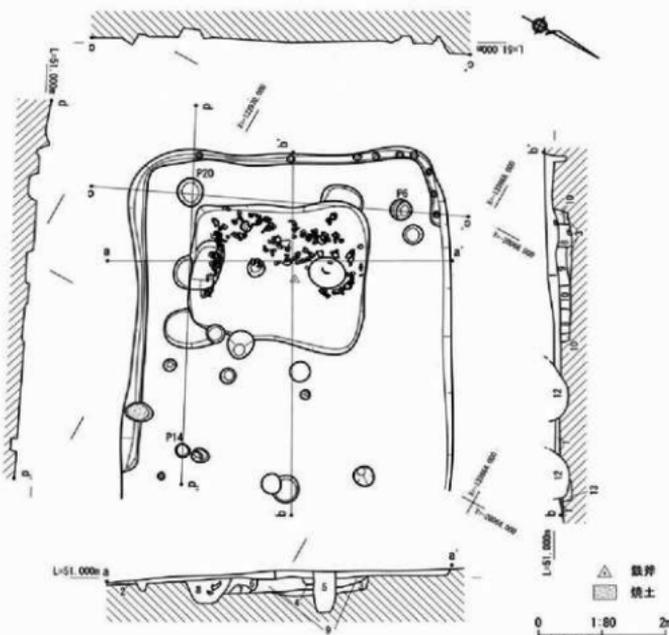
第16図 板状鉄斧出土状況



第17図 SH01遺物出土状況（西から）



第18図 SH01遺物出土状況（南から）



- | | | | | | |
|----|---------|--------------------------------------|-----|---------|---|
| 1層 | 25Y4/2 | 灰黄褐色土(φ1cm程の礫1%含む) | 8層 | 25Y3/2 | 黒褐色土(φ1cm程の礫1%、炭化物5%、土器2%含む) |
| 2層 | 10YR4/6 | 褐色粘質土(φ1cm程の礫1%含む) (SK1356) | 9層 | 25Y4/2 | 暗灰黄色土(φ1cm程の礫1%、10YR3/2 黒褐色土1%、炭化物2%含む) |
| 3層 | 25Y4/2 | 暗灰黄色土 | 10層 | 10YR4/2 | 暗灰黄色土 |
| 4層 | 25Y4/4 | オリーブ褐色土(25Y3/2 黒褐色土1%含む) | 11層 | 10YR4/6 | 褐色粘質土(φ1cm程の礫1%含む) |
| 5層 | 10YR5/1 | 暗灰色粘質土(土器5%含む) (SB05-Pit1540) | 12層 | | 攪乱 |
| 6層 | 10YR4/6 | 褐色土(φ1cm程の礫2%含む) | 13層 | 25Y3/2 | 黒褐色土 (Pit1483) |
| 7層 | 5Y6/3 | オリーブ黄色粘質土(7.5YR5/6 明褐色粘質土1%、炭化物1%含む) | | | |

第19図 SH01平・断面図

遺構からみても最も多くの遺物が出土した。

表土掘削直後の段階では住居跡の存在は確認できなかったが、遺物がまとまって出土する地点が認められた。後に遺構検出を行った結果この土器群は床面から浮いた状態であるがSH01に伴う遺物であると考えられ、住居廃絶後にある程度埋まっていた段階の沈み込みに廃棄されたものが、後世の耕作によって浮きあがったと判断した。

SH02はSH01に切られ、南側はすでに失われていた。周壁溝の存在は確認できなかった。また、東壁についてもそのほとんどが流出しているため確認は取れていない。しかし主柱穴を確認することができたことから東西6.5×南北推定5.0mの長方形と推定される。主柱穴はP01・02・03を想定し、南東側の1基は他の遺構によって攪乱されている。径は0.3m、床面からの深さは0.34m、柱間の距離は3.3×2.5m、床面までの残存深度は12.1cmで、

方位はN70° Eの長軸を東西
 にする。出土遺物は小破片の
 ため実測不能であった。

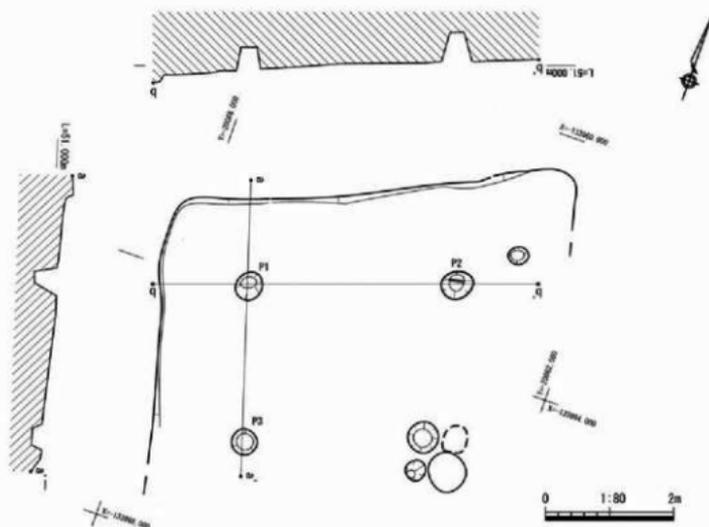
SH03は3.6×4.6mの長方形
 をして、SH02を掘削す
 ることによって初めて検出
 することができた。残存深
 度は39.2cmである。主柱穴
 はP04・10で径は0.4m、床面
 からの深さは0.25m、柱間
 の距離は2.0mの2本柱で、今
 回の調査において最も残存状
 態が良いものの一つである。な

お、主柱穴は褐色粘質土の上面から掘られており、この粘質土は貼り床とみられる。方位はN3° Eの長軸を南北にする。

SH14は住居跡03を掘削して初めて確認が取れた。検出状況は南北2.2m、東西2.9m、方位はN87° Wで東西に長軸を取り、周壁溝はほぼ全周する。小型の住居跡ともみられるが、



第20図 SH01完掘状況(南から)



第21図 SH02平・断面図

ベッド状遺構の一段さがった所の可能性が高いと考えられる。なお、壁が崩れたのか作り直した形跡がみられる。

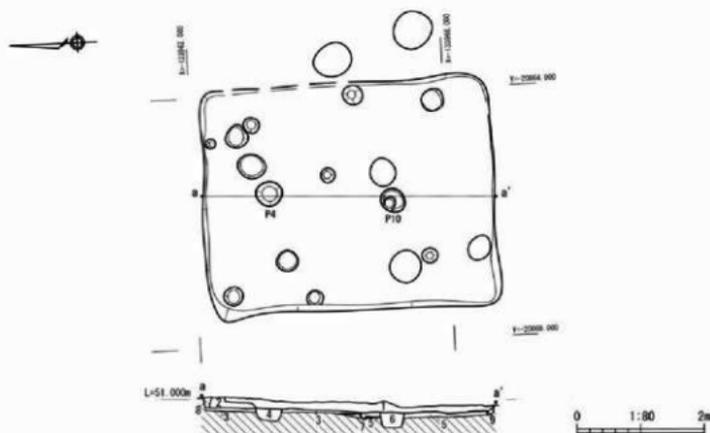
これらの切り合いからA群ではSH14が最初に建てられ、03・02と建て替えられ、最終的には01で廃絶していることが認められた。またこの群は当初から方形プランの住居跡が採用されている。

B群

SH06は直径5.9mの円形で、SH04・05に切られる。そのため、南側のほとんどが断続的

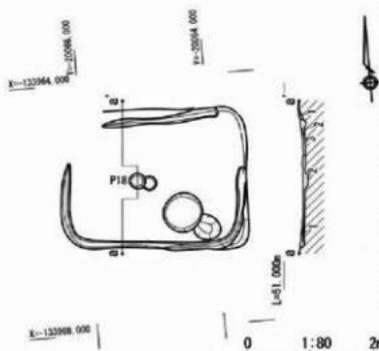


第22図 SH02完掘状況（南から）



- | | | | |
|----|--|----|---|
| 1層 | 75YR3/1 黒褐色粘質土(炭化物1%含む) | 6層 | 10YR5/6 黄褐色粘土(10BG6/1 青灰色粘土30%含む)(Pc10) |
| 2層 | 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土(φ2cm程の礫1%含む) | 7層 | 10YR6/8 明黄褐色粘土 (SH14古) |
| 3層 | 10YR4/4 褐色粘質土(φ1cm程の礫1%、10YR5/6 黄褐色粘土1%、炭化物1%含む) | 8層 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土(φ3cm程の礫2%、炭化物1%含む) |
| 4層 | 2.5Y3/2 黒褐色粘質土(炭化物1%含む) (Pc4) | 9層 | 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (SH14古) |
| 5層 | 5Y3/1 オリーブ黒色土(10YR5/6 黄褐色粘土1%、炭化物1%含む)(SH14) | | |

第23図 SH03平・断面図



- 1層 10YR6/8 明黄褐色粘土 (SH14古)
 2層 5Y3/1 オリーブ藍色土(10YR5/6
 黄褐色粘土1%,炭化物1%含む)
 3層 10B3G/1 青灰色粘土

第24図 SH14平・断面図

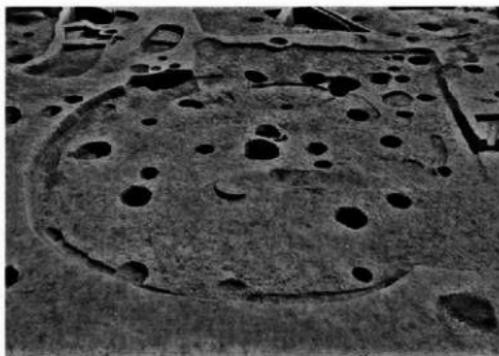


第25図 SH03・14完掘状況 (東から)

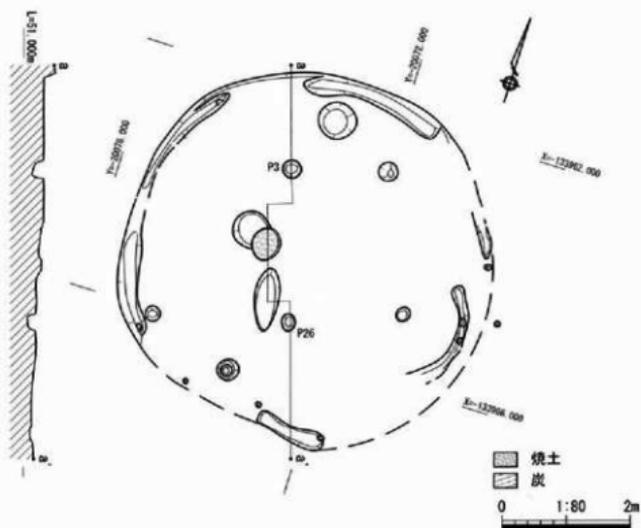
につながる周壁溝のみの検出となった。残存深度は約15cmである。主柱穴はP03・26の二本柱を想定し、径は0.3m、床面からの深さは0.13m、柱間の距離東西1.5×南北2.0mで方位は主柱穴を基準とした場合N18°Wである。また、円周の合わない周壁溝とみられる溝を検出しているため、別の小型の住居跡の存在も考えられるが、明確に把握できなかった。出土遺物に高杯がある。

SH05は1辺4.8mの方形で、SH04に切られて壁面のほとんどが失われているが、P1・6・1220・1414を主柱穴と想定した時そのあり方からほぼ正方形と判断した。残存深さは18cmである。主柱穴の径0.5m、床面からの深さは0.33m、柱間の距離は2.7mの方形で組まれる。方位はN3°Wを取る。

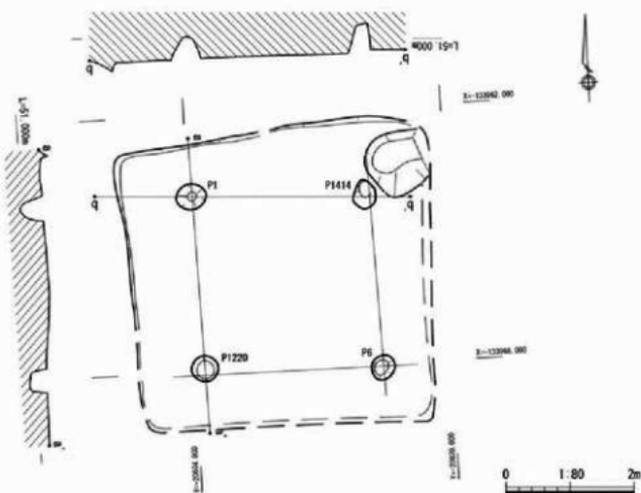
SH04は東西4.8m×南北4.4mの方形で、残存深度は約16cmである。主柱穴はP3・8・11・17を想定した。ピットを多数検出したがSH06・05のピットと確認出来ずSH04の図にまとめて



第26図 B群完掘状況 (西から)



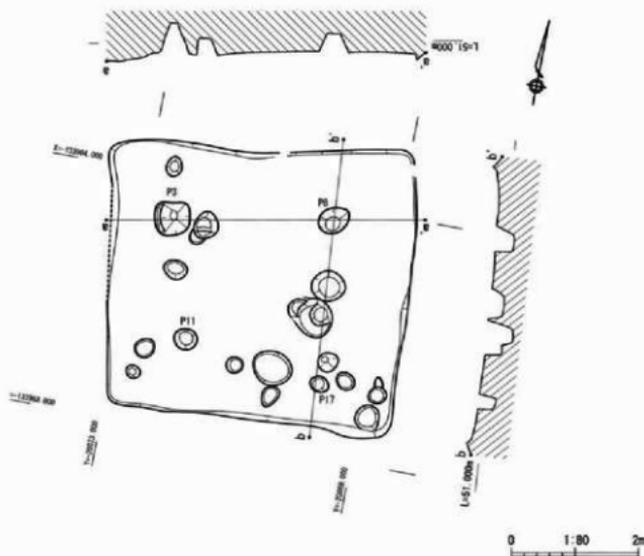
第27图 SH06平・断面图



第28图 SH05平・断面图

掲載した。径の平均は0.5m、床面からの深さは0.36m、柱間の距離は2.5mの方形に組まれる。方位はN12° Wをとる。B群の中では最終段階で建てられたと考えられる。

B群の切り合いから06・05・04の順に建て替えられていったことが認められた。



第29図 SH04平・断面図

C群

SH08は周壁溝と地床炉とみられる焼土のみの検出となりほとんどの部分がSH15・16に切られていたり、擾乱によって破壊されていて、住居の南西コーナー部分が検出できたのみである。東西2.4m以上×南北1.5m以上で、南辺ぎわに炉がとりつく。

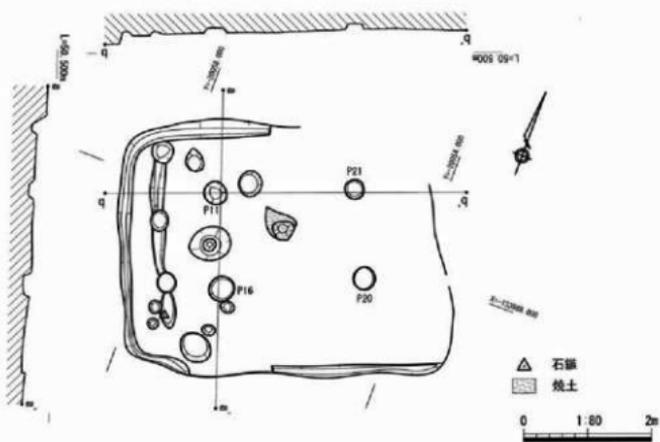
SH09は建てられた当初は東西4.4m×南北4.0mの隅丸長方形であったが、西側への拡張が行われ5.1m×4.0mとなったことが周壁溝のあり方から見て取れる。中央付近に炉跡と考えられる焼土を確認した。焼土は1ヶ所しか認められず、拡張後も、継続して使われていた可能性がある。残存深度は約14cmである。主柱穴はP11・16・20・21を想定し、径の平均は0.35m、床面からの深さは0.1m、柱間の距離は2.2×1.5mで方位はN70° Eを取る。出土遺物に石織がある。



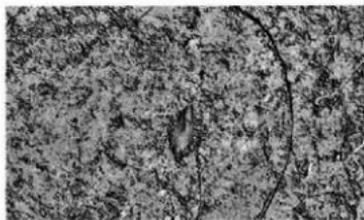
第30図 SH08平面図



第31図 C群完掘状況（北から）



第32図 SH09平・断面図



第33図 SH09石鏝出土状況



第34図 SH10スクレイパー出土状況

SH10は長径5.0m、短径4.6mの東西にやや長い楕円形で保存状態は今回調査した中では最もよかった一つで、中央土壌を検出した。残存深度は約19cmで、支柱穴はP02・05の二本柱を想定し、径の平均は0.2m、床面からの深さは0.15m、柱間の距離は2.2mで方位は支柱穴を基準とした場合N28°Eを取る。出土遺物は壺、高杯、石鏝がある。



第35図 SH09完掘状況（北から）

SH15は周壁溝の一部を検出したのみで、コーナーの部分ではないために正確な形状も不明であるが、その形状が直線的であるため方形もしくは隅丸方形であることは推定される。検出したのは中央に地床がとみられる焼土を検出した。



第36図 SH10遺物出土状況

SH16は長径7.8m、短径6.5mの楕円形で、今回検出した住居跡では最大である。方位はN33°Wの南北に長軸を取る。ただ、平面的に円周の合わない部分が認められるため、2棟の住居跡が重なっている可能性があるが、SH09や10による攪乱によって確認を取ることができなかった。

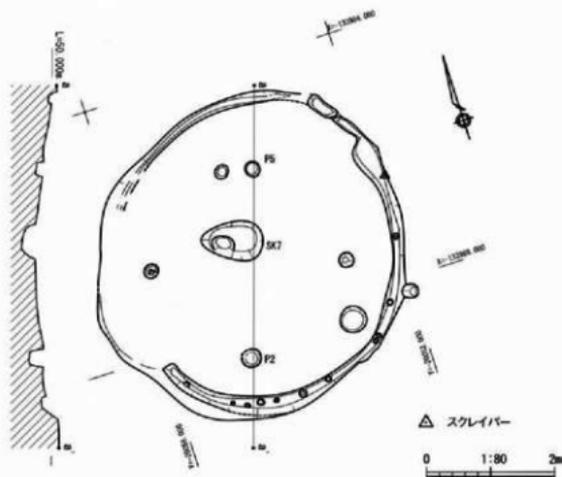
D群

SH11は斜面上に作られているため南側の土砂が流出し、東側は土坑によって攪乱されているため正確な規模は不明だが、1辺3.9m（推定）の方形と考えられ、残存深度は約29cmである。支柱穴はP01・07を想定したが南側は確認が取れなかった。径の平均は0.25～0.4m、床面からの深さは0.14m、柱間の距離は2.2mで、方位はN20°Wを取る。

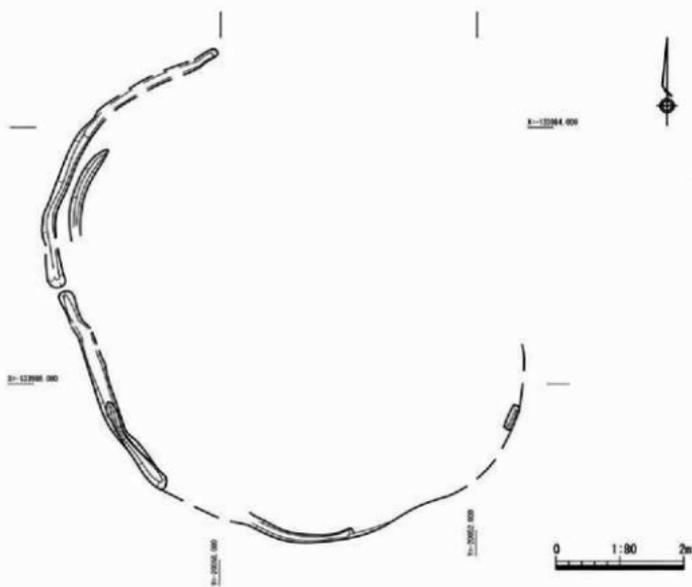


第37図 SH15平面図

SH17は推定直径4.1mの円形であるが、周壁溝の一部を検出のみであるため詳細は不明である。周壁溝内からサヌカイトの



第38図 SH10平・断面図



第39図 SH16平面図

コアが出土している。

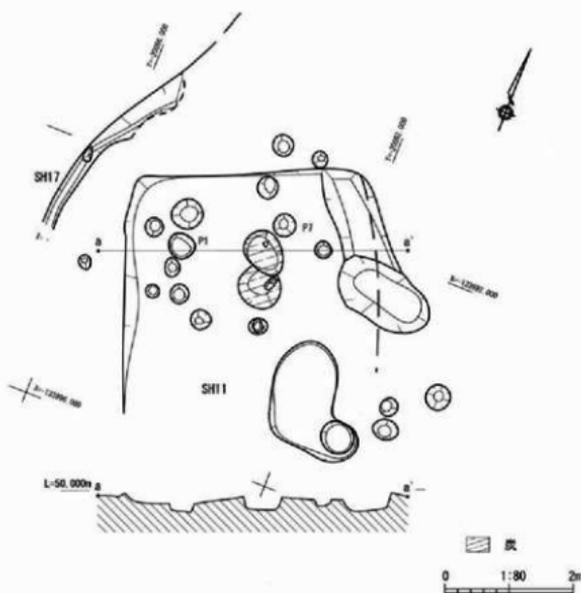
その他

SH13はほとんどの部分が後世の擾乱によって破壊され遺存状態が良くなく、周壁溝のみの検出となった。残存している部分は2.6×3.0mで方位をN1°Wを取り、ほぼ真北である。

SH07は直径6.1mの円形と考えるが、南側が直線的であることか



第40図 D群完掘状況（東から）

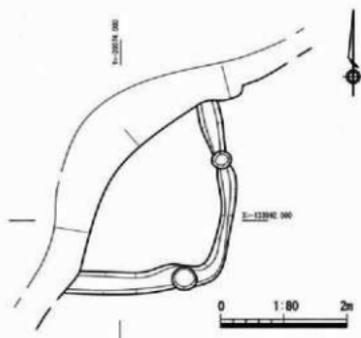


第41図 SH11・17平・断面図

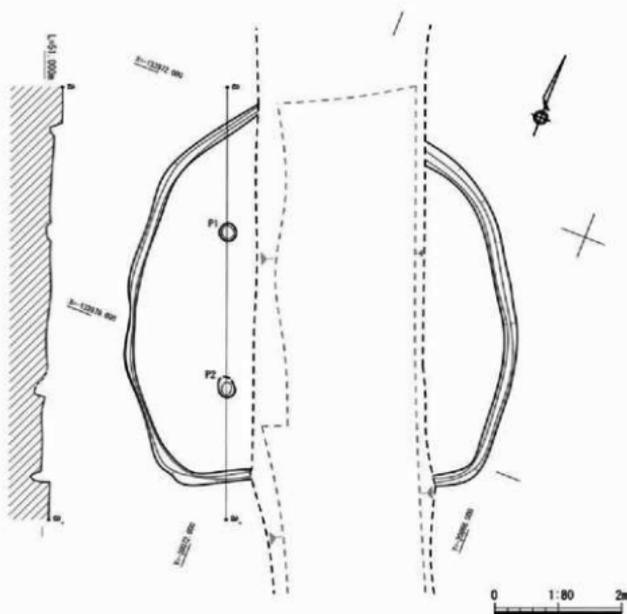
ら五角形を意識しているのかもしれない。残存深度は約15cmである。主柱穴はP01・02を想定したが東側は検出できなかった。径の平均は0.3m、床面からの深さは0.1m、柱間の距離は2.5mで方位はN22°Wを取る。

建物跡は4棟検出しているが棟持ち柱を持つ建物は検出していない。ほとんどの柱穴が深く掘られているため倉庫としての機能が考えられる。ただ、柱穴内からの遺物が細片のためほとんど実測不能であった。

SB01は住居跡B群の南で検出したP1224・1226・1228・1232・1266・1435・1471・1289で構成され、梁行1間、桁行3間の3.65m×4.2mの建物である。柱穴の大きさは0.25～0.5m、西側柱列の柱間の距離は1.2m平均で



第42図 SH13平面図



第43図 SH07平・断面図

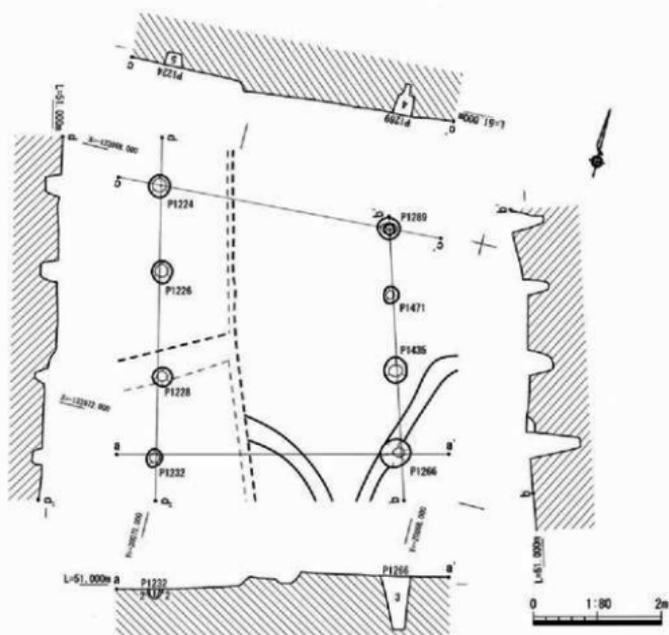
方位はN19° Wで長軸を南北に取る。

SB02はSH07の南東で検出したP1268・1359・1403・1326・1331・1236で構成され、桁行3間、梁行2間以上で、4.6m×3.6m以上の建物である。柱穴の大きさは0.4から0.6m、柱間の距離の平均は1.6mで、方位はN84° Wで南北2間とすれば、東西に長軸を取る。

SB03は住居跡A群の南側で検出したP1437・1385・1401・1467。



第44図 SB01発掘状況 (西から)



- | | | | | | |
|----|----------|------------------|----|---------|------------------|
| 1層 | 10YR6/6 | 明褐色粘質土(炭1%含む) | 4層 | 10YR5/4 | に灰い黄褐色粘質土(炭1%含む) |
| 2層 | 7.5YR5/6 | 明褐色粘質土 | 5層 | 10YR5/6 | 黄褐色粘質土(炭1%含む) |
| 3層 | 10YR6/4 | に灰い黄褐色粘質土(炭1%含む) | | | |

第45図 SB01平・断面図

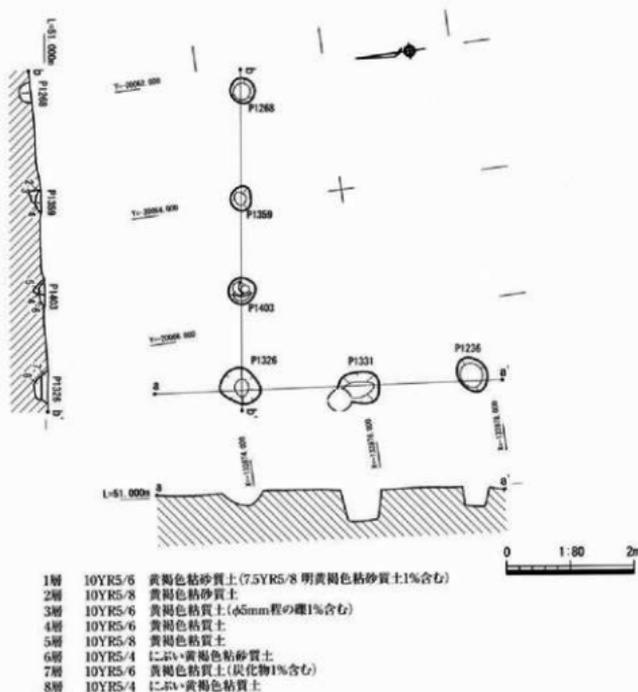
桁行1間以上、梁行1間で1.5m以上×3.5mである。方位はN73°Eで東側は調査区の外ガケ面となるために確認ができないが東西に長軸を取ると考えられる。

SB04はSH13の北側で検出したP2002・2003・2018・2019・2536・2005で構成される建物跡で桁行2間、梁行1間で南北に長軸を取る。東西の柱間の取り方が変則的で、それぞれ1.4m、2.0mである。方位はN40°Eを測る。

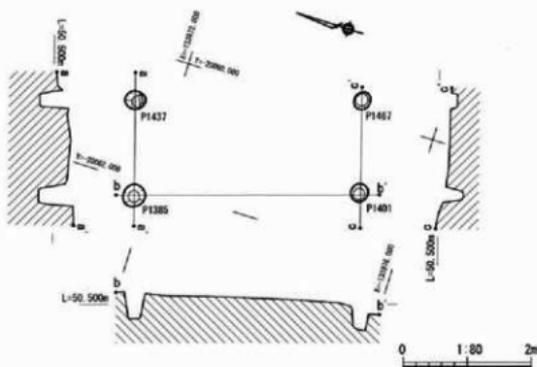
溝状遺構SD01は1トレンチの南東部を区画するように検出し



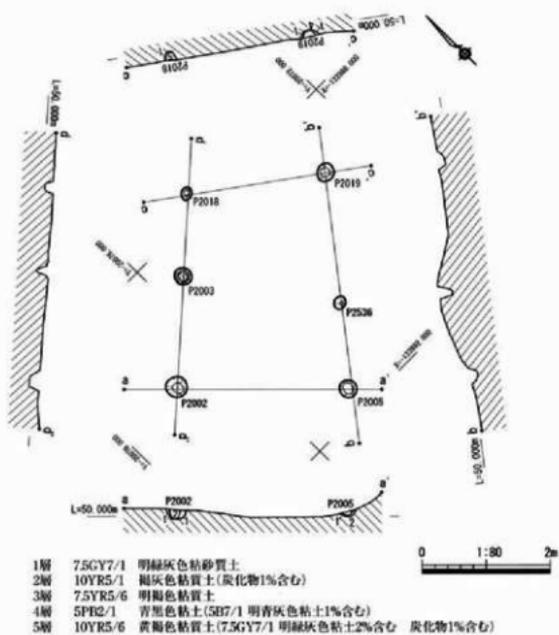
第46図 SB02完掘状況（西から）



第47図 SB02平・断面図



第48図 SB03平・断面図



第49図 SB04平・断面図

た。SH01・SH07より新しく、SB01より古い。幅は0.3mで、住居跡B群とSB02がセット関係にあるとすれば倉庫と居住区とに分け隔てた区画溝にも見える。

土坑

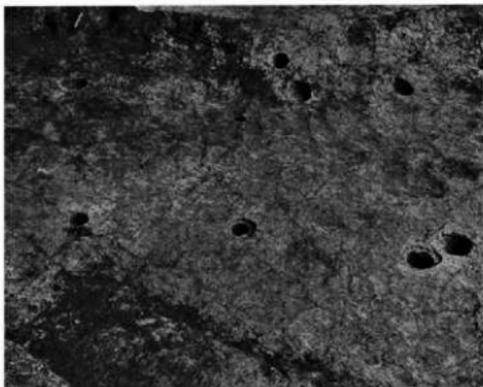
SK1377を検出した。遺物の出土量はSH01に次ぐ多さで、SH03を切っている。法量は南北1.7m、東西は東斜面によって土砂の流出が見られ1.6mの残存が認められる。形状は不定形である。出土遺物は壺、甕、高杯がみられる。検出した状態や遺物から廃棄土坑と考えられ、位置的にはSH04に付随すると考えるのが妥当と考える。

SK1473はSK1377の下から検出した。壺蓋が出土し、その対となる壺がSK1377から出土していることから、同一遺構の可能性もある。

SK1356はSH01の南に隣接して検出した。検出当初はSH01と共に後世の攪乱によって遺物が散乱していた土器群と隣接していたためその規模が不明であったが、遺物を取り上げ、その後精査を進めていく段階で南北約1.1m、東西0.7m、深さ約0.1mの浅い土坑であると判明した。出土遺物に壺、甕、鉢などがある。

野外地床炉

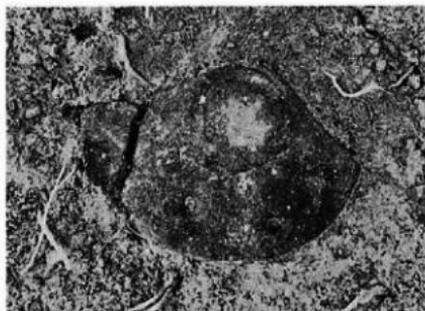
SX1385がこれにあたる。検出した場所はSH01の南のトレンチ東壁にほ



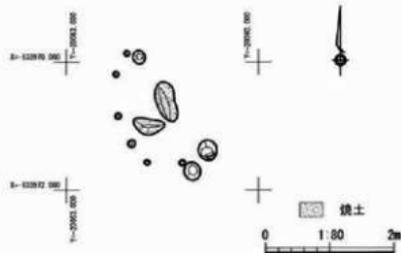
第50図 SB04完掘状況（北から）



第51図 SK1377遺物出土状況



第52図 SK1473壺蓋出土状況



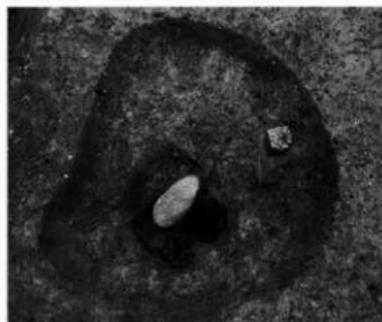
第53図 SX1385平面図



第54図 SX1385完掘状況（南から）



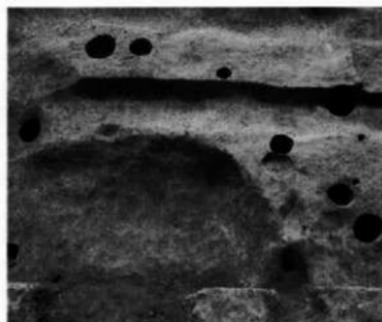
第55図 SH04完掘状況（南から）



第56図 P1285遺物出土状況（南から）



第57図 SH10完掘状況（西から）



第58図 SB03完掘状況（東から）

表1 縦穴住居跡法量

遺構番号	径または辺 (m)	主柱穴距離 (m)	形状	方位	備考
SH01	推定5.9×5.2	4.15×3.4	長方形	N28° E	
SH02	6.5×推定5.0	3.3×2.5	長方形	N70° E	SH01に切られる
SH03	3.6×4.6	2.0 (二本柱)	長方形	N 3° E	SH02に切られる
SH04	4.8×4.4	1.9×2.6	方形	N12° W	
SH05	4.8	2.7~2.8	方形	N 3° W	SH04に切られる
SH06	5.9	1.5×2.0	円形	N18° W	SH05に切られる
SH07	6.1	2.5	円形	N22° W	
SH08	2.4以上×1.5以上	—	長方形?	—	覆乱により全体は不明
SH09	5.1×4.0	2.2×1.5	長方形	N70° E	
SH10	5.0×4.6	2.2	円形	N28° E	SH09に切られる
SH11	3.9 (推定)	2.2	方形?	N20° W	
SH12	(3.0×2.5)	3.8? 二本?	長方形	N76° E	庄内期 ベッド状遺構
SH13	2.6以上×3.0以上	—	方形?	N 1° W	覆乱により全体は不明
SH14	(2.9×2.2)	—	長方形?	N87° W	SH03に切られる ベッド状遺構
SH15	—	—	方形?	—	覆乱により全体は不明
SH16	7.8×6.5	—	円形	N33° W	SH09に切られる
SH17	推定4.1	—	円形	—	SH11に切られる

表2 建物跡法量

遺構番号	間数	梁行×桁行 (m)	方位	備考
SB01	1×3	3.65×4.2	N19° W	
SB02	2以上×3	3.6以上×4.6	N84° W	
SB03	1×1以上	3.5×1.5以上	N73° E	
SB04	1×2		N40° E	
SB05	2×2	2.6×3.4	N71° E	古墳時代

ど近い場所で、中央に焼土がありそれを囲うように杭列が配置される。

(庄内期～古墳時代前期)

縦穴住居跡1棟、掘立柱建物跡1棟を検出した。

SH12は3.0×2.5mの長方形で残存深度は約44cm。方位はN76°Eの東西に長軸をとり、ほぼ中央に地床炉を持つ。周囲は削平され、支柱穴とベッド状遺構の1段さがった所が残った可能性がある。出土遺物は庄内式土器の甕が出土している。

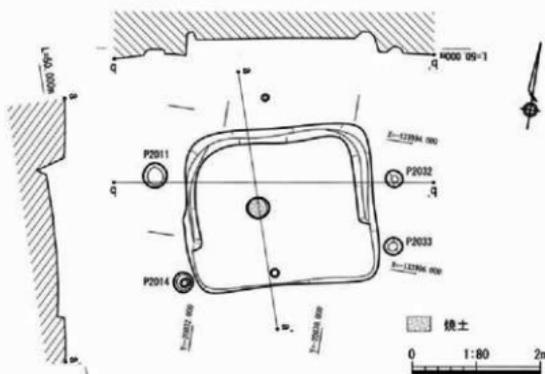
SB05はP1542・1543・1544・1545・1540・1541・1382・1381で構成される建物跡で桁行2間の3.4m、梁行2間2.6mで東西に長軸を取る。柱穴の大きさは0.5mで方位はN71°Eである。P1540から布留式土器の甕が出土している。

(古墳時代後期)

土坑3基を検出した。

SK1316は1.5×1.0m。SH04を切る。検出当初土坑墓の可能性が考えられたが、後世の削平が顕著であるため性格は不明である。出土遺物はTK209併行期の須恵器杯蓋がある。

SK1321は1316の南側で検出した。一辺約1.1mの隅丸方形の土坑で、深さは約0.05m



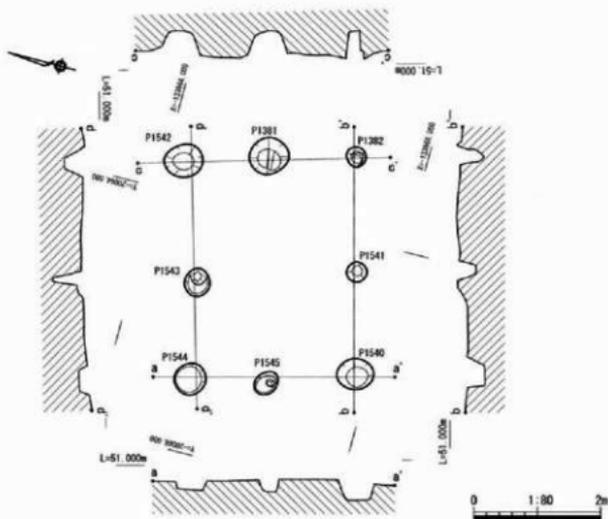
第59図 SH12平・断面図



第60図 SH12完掘状況(南から)



第61図 SB05完掘状況(西から)



第62図 SB05平・断面図

を測る。出土遺物は見られず、性格も不明であるが上記の土坑と同時期のものと判断する。

SK1314は径0.8mの円形のもの。SH04の北辺を切る。土師器高杯が伏せられ、チャート質の石で重しがかけられた状態で出土した。

(近世)

SX1400をトレンチ北東隅で検出した。埋土の最下層がグライ化した状態であったことや汚れがほとんど見られないことから水溜としての機能が考えられる。陶磁器片や伏見人形の馬・五銚弁などが出土している。

(近代)

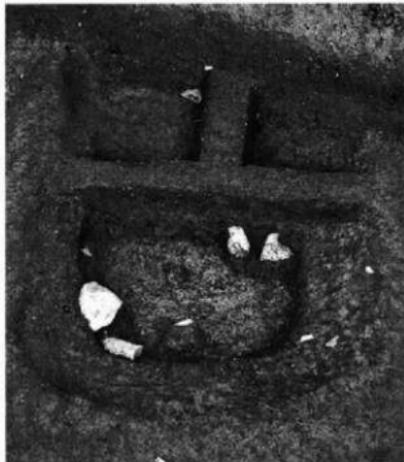
焼成坑を1トレンチ南西で検出した。覆い屋に葺かれていたとみられる瓦が出土している。炭焼きの跡かと考えられる。



第63図 SK1316完掘状況(南から)



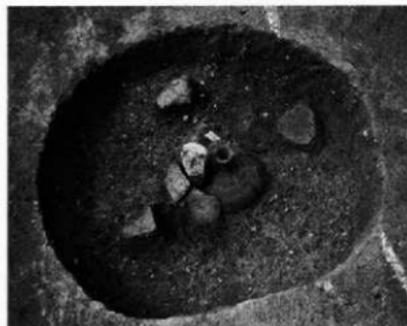
第64図 SB05のP1540遺物出土状況（南から）



第67図 SX1400遺物出土状況（南から）



第65図 SK1316遺物出土状況（南から）



第66図 SK1314遺物出土状況（東から）



第68図 焼成坑検出状況（南から）

(4) 遺物

出土遺物はコンテナバット約20箱出土している。ほとんどは弥生時代中期後半のもので、器種構成は壺、甕、高杯、鉢、水差しなどがあるがいずれもⅣ様式後半になり、生駒西麓などからの搬入土器もみられる。石器としては石鏃5点、磨製石鏃1点、剥片石器、スクレイパー、砥石、剥片数点と敲石、石皿とみられるもの数点が出土している。鉄器は板状片刃鉄斧が1点出土している。

1 弥生時代の遺物

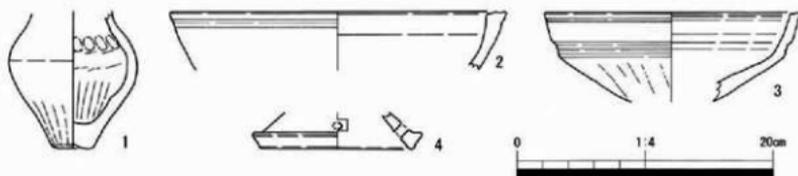
1) 土器

SH10 (第69図1~4)

壺 1は小型壺である。肩部は丸みを帯び、底部は凹状である。内面頸部~肩上部にかけ指オサエがみられ、肩部はナデ調整、体部下半部は内外面ともにタテナデ調整を施す。残存高10.7cm、底径3.1cmを測る。

鉢 2は口縁部が肥厚し、口縁部端面に2条の凹線紋、口縁部外面に1条の凹線紋を巡らす。内面口縁部~体部にかけてナデ調整を施すが、外面は摩滅して調整は不明。口径26.0cmを測る。

高杯 3は体部中程で屈曲する深い椀状の杯部で、口縁部はやや直立ぎみに立ち上がる。口縁部に1条の凹線紋、体部に2条の凹線紋を巡らす。口縁部~体部上半部の内外面はヨコナデ調整、体部下半部外面は不定方向のナデ調整を施す。口径19.8cmを測る。4は脚部で、裾端部が上方へつまみ出されて面をつくる。裾部には四方に穿孔している。裾部の内面は不定方向のナデ調整、外面はヨコナデ調整を施す。全て山城Ⅳ-2様式^(註)。



1:レンナ SH10:壺(1)、鉢(2)、高杯(3-4)

第69図 遺物実測図(1)



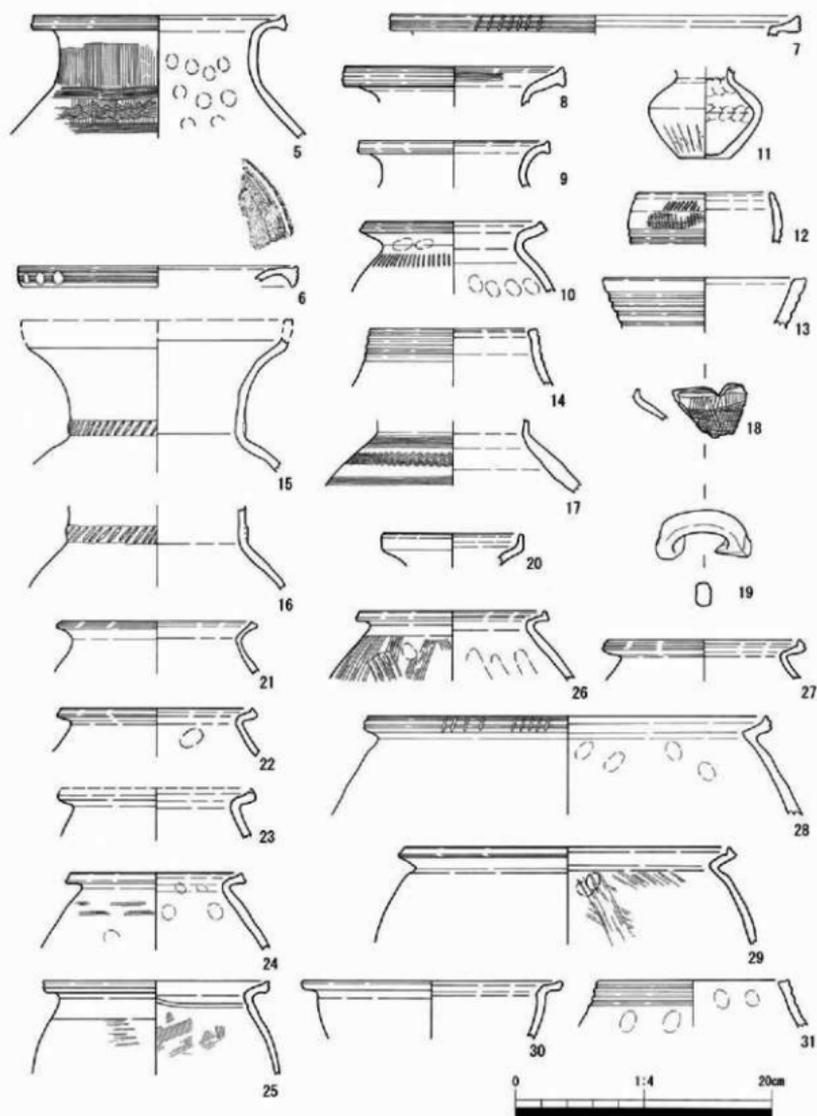
第70図 SH10出土遺物

SH01 (第71図5～31 第78図32～51)

壺 5～10は広口壺である。5の頸部はほぼ直立に立ち上がり、口縁部は外反し、端部を上下方向につまみ出す。口縁部端面に3条の凹線紋を巡らし、頸部から体部にかけて縦方向のハケメを施した後、体部に櫛描き直線紋と波状紋を交互に加飾する。内面は口縁部にヨコナデ調整、頸部～体部にかけて指オサエ後ナデ調整、口径19.6cmを測る。6の口縁部は水平方向に外へ開き、端部は上下方向につまみ出す。口縁部内面に縞状紋を施し、端面には3条の凹線紋を巡らした後、円形浮紋を貼り付ける。内外面ともにナデ調整を施す。口径21.6cmを測る。7の口縁部は直角に屈曲し、肥厚した端部を上方へつまみ上げる。口縁部端面に2条の凹線紋を巡らした後、刻み目紋を施す。内外面ともにナデ調整を施す。口径32.0cmを測る。8の口縁部は外へ緩やかに広がり、端部を上下方向に拡張した端面に3条の凹線紋を巡らす。口縁部内面にヘラミガキを施す。口径14.8cmを測る。9は口縁部が外反し、端部を上下方向に拡張し丸く収め、内外面ともヨコナデ調整を施す。口径14.8cmを測る。10は頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁部端面に2条の凹線紋を巡らし、体部には刻み目を施す。内面は口縁部～頸部にかけてヨコナデ、体部はナデ調整と指圧痕が残る。外面は口縁部にヨコナデ、頸部は指オサエ後ヨコナデ、体部はナデ調整を施す。口径13.7cmを測る。11は小型壺で、口縁部は欠損している。体部は算盤玉の形をし、底部は平坦である。体部の器壁は厚手であるが底部はそれに比べて薄手である。内面は指オサエ後ナデ調整、外面は頸部～体部上半部にかけてナデ調整、体部下半部はヘラケズリを施す。残存高7.1cm、底径3.6cmを測る。12は口縁部が緩く内湾し、端部は丸く収める。器壁は厚手で、口縁部外面に上から順に櫛描き列点紋・縞状紋・凹線紋を巡らす。内面にヨコナデ調整を施す。口径10.4cmを測る。13は直口壺である。口縁部は直線的に外へ開く。肉厚の口縁部外面に3条の凹線紋を巡らす。口径15.8cmを測る。14は無頸壺である。若干内傾している口縁部外面に4条の凹線紋を巡らす。内外面ともにナデ調整を施す。口径12.85cmを測る。15は頸部が外反しながら長く立ち上がり、口縁部は直立ぎみに立ち上がると思われる。頸部には刻み目紋突帯を貼り巡らす。内外面ともに摩滅して調整は不明。16は頸部が直立ぎみに立ち上がる。頸部には刻み目紋突帯を貼り巡らす。内外面ともに摩滅して調整は不明。17は頸部が若干外傾し、体部の器壁は厚手である。外面にナデ調整を施した後、頸部直下から櫛描き直線紋と波状紋を交互に加飾する。内面は摩滅して調整は不明。18は頸部片である。外面にタテハケ調整を施したのち体部に刻み目紋を、内面にはヘラナデ調整を施す。13のみ山城Ⅳ-3様式で、他は全て山城Ⅳ-2様式である。

把手 19は断面の形は長方形である。全体にナデ調整を施している。最大長7.5cmを測る。

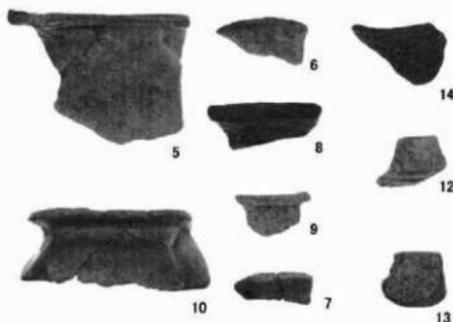
壺 20～29は口縁部である。20は受け口状口縁で口縁部をほぼ垂直に立ち上げ、端部は丸く収める。内外面ともに摩滅して調整は不明。口径10.7cmを測る。近江産と思われる。21は口縁部が「く」の字状に緩やかに外反し、端部を上方へ短くつまみ上げ尖る。内外面



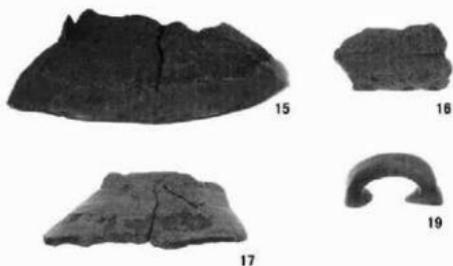
1フレンチ SH01: 破(5-18)、把手(19)、臺(20-29)、鉢(30・31)

第71図 遺物実測図(2)

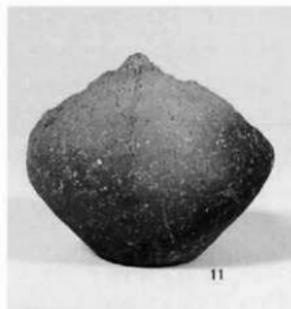
の口縁部はヨコナデ調整、体部はナデ調整を施す。口径14.8cmを測る。22は口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部を上方へ短くつまみ上げ尖り気味。内外面の口縁部はヨコナデ、体部はナデ調整を施す。内面には指圧痕が残る。口径15.0cmを測る。23は口縁部が「く」の字状に屈曲しているが、口縁端部を欠損している。体部は内外面ともにナデ調整を施すが、口縁部は摩滅して調整は不明。推定口径14.8cmである。24は口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部を上方へつまみ上げ尖り気味。内外面の口縁部はヨコナデ調整、頸部～体部にかけて指オサエ後ナデ調整を施す。口径13.3cmを測る。25は口縁部が「く」の字形に屈曲し、口縁端部は外側へつまみ出され尖り気味。口縁部端面に凹線紋を巡らし、体部内面には左上がりの溝が1本はしる。内面は口縁部～頸部にかけてヨコナデ調整、体部は斜め方向のハケメ調整。外面の頸部はヨコナデ調整、体部はタタキを施す。口径17.5cmを測る。26は口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部を上方へつまみ上げるが、若干内傾する。口縁部内外面ともにヨコナデ調整、内面は頸部～体部にかけてナデ調整、体部外面にはハケメ調整を施す。口径14.4cmを測る。27は口縁部が「く」の字状に屈曲し、肥厚した口縁端部を上方へつまみ上げる。口縁部端面に2条の凹線紋を巡らす。口縁部～頸部にかけてナデ調整を施す。口径15.0cmを測る。28は口縁部が「く」の字状に屈曲し、肥厚した口縁端部を



第72図 SH01出土遺物 (1)



第73図 SH01出土遺物 (2)



第74図 SH01出土遺物 (3)

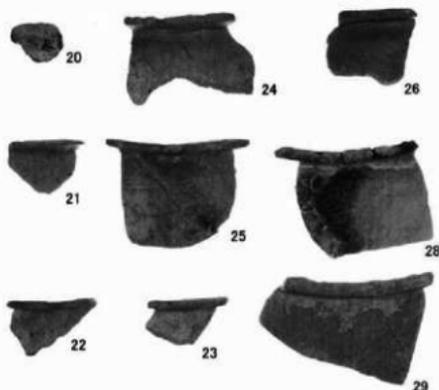
上方へつまみ上げ丸く収める。口縁部端面に2条の凹線紋を巡らした後、刻みを施す。口縁部はヨコナデ調整、体部は指オサエ後ナデ調整を施す。口径31.2cmを測る。29は口縁部が「く」の字状に屈曲し、口縁端部を上方へつまみ上げるが、若干内傾する。内面は口縁部～体部にかけて指オサエ後ナデ調整、外面は口縁部ヨコナデ調整、体部ナデ調整を施す。内面のナデ調整は縦方向と横方向がみてとれる。口径25.4cmを測る。

21～24・26・27は山城Ⅳ-3様式、25・28・29は山城Ⅳ-2様式である。

鉢 30は口縁部を外へ屈曲させ、端部は上方へつまみ上げて丸く収める。口縁部の内外面ともにヨコナデ調整を施すが、体部は摩滅して調整は不明。口径20.1cmを測る。山城Ⅳ-3様式。31は口縁部が内傾し、端面が僅かに窪む。口縁部外面に3条の凹線紋を巡らす。内外面ともに指オサエ後ナデ調整を施す。口径14.8cmを測る。山城Ⅳ-2様式。

高杯 32～36は口縁部である。32は水平口縁で、端部はやや開きぎみに垂下し、内面に突帯を貼り付け、口縁部端面に2条の凹線紋

を巡らす。内面は口縁部にヨコナデ調整、体部ヨコミガキ、外面はナデ調整を施す。口径22.9cmを測る。33は水平口縁で、端部は外へ開くように垂下すると思われる。内面には丁寧なヘラミガキを施すが、外面は摩滅して調整は不明。口径21.8cmを測る。34は水平口縁で、端部は欠損しているがほぼ真っ直ぐ垂下すると思われる。口縁部内面に突帯を貼り



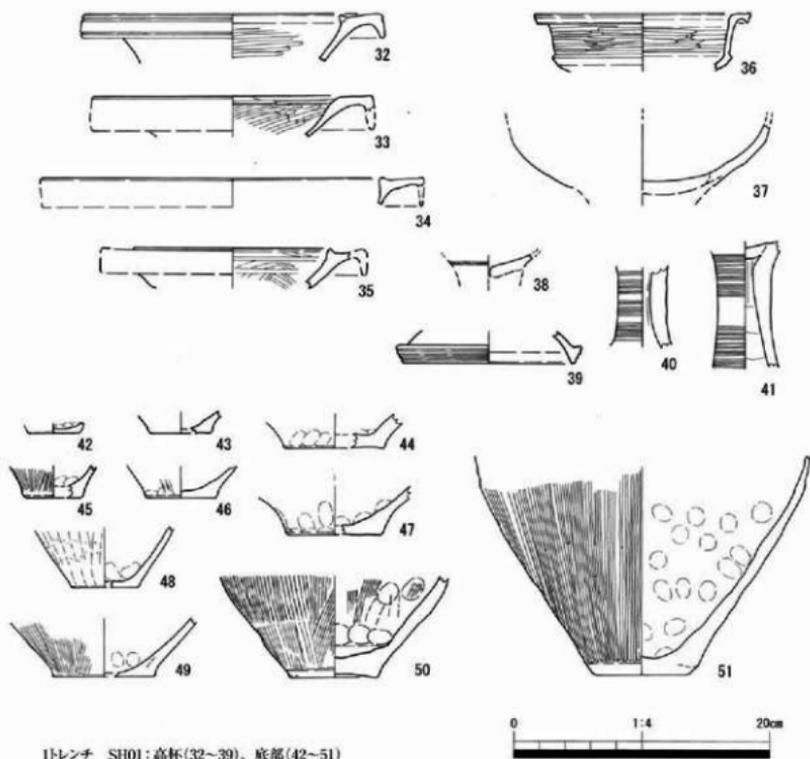
第75図 SH01出土遺物(4)



第76図 SH01出土遺物(5)



第77図 SH01出土遺物(6)



トレンチ SH01:高杯(32~39)、底部(42~51)

第78図 遺物実測図(3)

付ける。内外面ともに剥離して調整は不明。口径30.0cmを測る。35は水平口縁で、端部は欠損している。口縁部内面に突帯を貼り付ける。内面はナデ調整の後ミガキを、外面はナデ調整を施す。口径15.4cmを施す。36は口縁部が外へ屈曲し水平方向に伸び、端部は上下方向につまみ出す。体部は屈曲した下部に丁寧なヘラミガキによる沈線が入り、ほぼ垂直に立ち上がる。内外面ともに口縁部はヨコナデ調整を施す。口径16.8cmを測る。胎土や形態から在地産ではなく搬入品であるが、特殊な形態のため産地は不明である。37は杯部



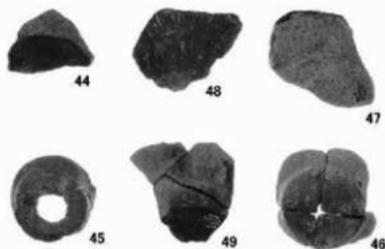
第79図 SH01出土遺物(7)

37は杯部

が緩やかに弧を描きながら外に拡がり、深めの椀状を呈する。杯部と脚部の接合は円盤充填法で行なわれている。内外面ともに摩滅して調整は不明。38は杯底部である。底部中央には上から穿孔されるが、用途は不明である。摩滅して調整は不明。39は裾部が湾曲し、端部を斜め上方につまみ上げ、端面には3条の凹線紋を巡らす。裾部内面はナデ調整を施す。

40は柱状部に6条の櫛描き直線紋を5帯巡らす。内面はナデ調整、外面はミガキを施す。41は柱状部に11条の櫛描き直線紋を2帯巡らす。内面はナデ調整を施す。全て山城Ⅳ-2様式である。

底部 42の底部は平坦である。内外面ともに指オサエ後ナデ調整を施す。底径3.75cmを測る。43は底部からほぼ垂直な立ち上がり部をもち、体部は大きく拡がり、底部は円盤成形を行なうが、やや凹状を呈する。内外面ともにナデ調整を施す。底径5.4cmを測る。44は底部からほぼ垂直な立ち上がり部をもち、体部は大きく拡がり、底部は円盤成形で体部との繋ぎ目は指オサエを、内面はナデ調整を施している。底部はやや凹状を呈する。底径7.9cmを測る。45は底部からほぼ垂直な立ち上がり部をもって、体部は緩やかに拡がる。底部は平坦である。内面は指オサエ後ナデ調整、外面はハケメを施す。底径4.4cmを測る。46は底部からほぼ垂直な立ち上がり部をもち、体部は大きく拡がる。底部はやや凹状を呈する。内外面ともに指オサエ後ナデ調整を施す。底径5.4cmを測る。47は底部から外傾する立ち上がり部をもち、更に体部は拡がる。底部は平坦である。内外面ともに指オサエ後ナデ調整を施す。底径7.3cmを測る。48は底部からの立ち上がり部をもち、体部は緩やかに拡がる。底部はやや凹状を呈する。内面は指オサエ後ナデ調整、外面の体部はヘラケズリ、底部との繋ぎ目は板ナデを施す。底径5.1cmを施す。49は底部からほぼ垂直な立



第80図 SH01出土遺物(8)

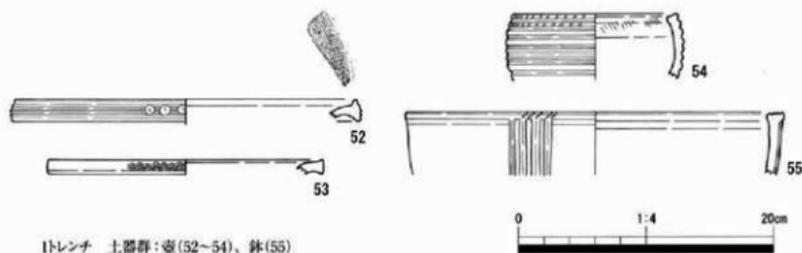


第81図 SH01出土遺物(9)



第82図 SH01出土遺物(10)

立



1トレンチ 土器群：壺(52~54)、鉢(55)

第83図 遺物実測図(4)

ち上がり部をもち、体部は大きく広がる。内面は指オサエ後ナデ調整、外面は体部にハケメ、底部はナデ調整を施す。底部は平坦である。50は底部から外傾する立ち上がり部をもち、体部は外へ直線的に広がる。底部はやや凹状を呈する。内面は指オサエ後ナデ調整とハケメを、外面はハケメ調整を施す。底径6.7cmを測る。51は体部が底部から緩やかに広がりながら立ち上がり、底部は凹盤成形を行ない、平坦である。内面は指オサエ後ナデ調整、外面は丁寧なミガキを施す。底径7.0cmを測る。

1 トレンチ 土器群(第83図52~55)

SH01の上面から出土しているが、後世の攪拌により上がってきたものと考えられる。

壺 52は口縁部が外反し、肥厚した端部を上下方向につまみ出し丸く収める。口縁部内面には簾状紋を施し、端面に4条の凹線紋を巡らした後、凹形浮紋を貼り付ける。内面は摩滅して調整は不明、外面はヨコナデ調整を施す。口径26.6cmを測る。53は口縁部が



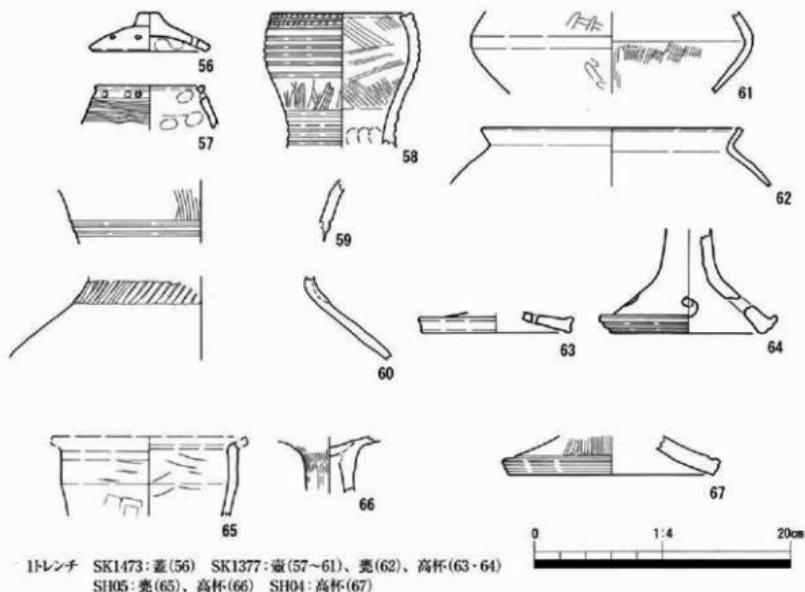
第84図 土器群出土遺物

外反し、端部を上方へつまみ上げる。口縁部端面に櫛描き波状紋を施す。内面は摩滅して調整は不明、外面はヨコナデ調整を施す。口径21.4cmを測る。54は口縁部が内湾し、口縁部端面はヨコナデによりやや窪む。外面には凹線紋を巡らしているが、最上段は刻み目紋を施した後、凹線紋を巡らしている。内面はハケメ後ナデ調整を施す。口径12.6cmを測る。以上3点は山城Ⅳ-2様式である。

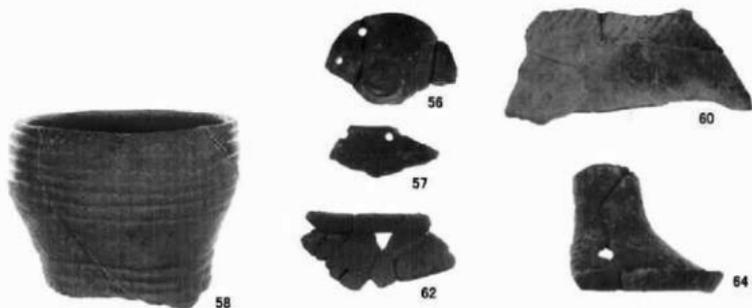
鉢 55は口縁端部を若干外へつまみ出し平坦な面を持ち、体部はほぼ垂直に立ち上がる。口縁上端面に3条の凹線紋を巡らし、口縁端部に刻み目紋、体部には棒状浮紋を施す。内面はナデ調整を施すが、外面は摩滅して調整は不明。口径29.6cmを測る。山城Ⅳ-2様式である。

SK1473(第85図56)

壺蓋である。内面は指オサエ後ナデ調整、外面はナデ調整を施す。天井部には2孔1対



第85図 遺物実測図(5)



第86図 SK1473・1377出土遺物

の孔が外側から開けられている。SK1377から出土した無頸壺(57)の壺と思われる。山城Ⅳ-2様式である。

SK1377(第85図57~64)

壺 57は無頸壺である。内傾する口縁部の断面は「T」字状を呈する。体部に櫛描き直線紋が施されているが波打っている。口縁部に2孔1対の孔を外側から開けているが、孔

と孔の間に開けて塞いだ痕がみられる。内外面ともに指オサエ後ナデ調整を施す。口径8.1cmを測る。58は口頸部が緩い「S」字状を描き、端部は強いヨコナデにより窪む。口頸部に凹線紋を巡らす。最上段には刻み目を施した後、凹線紋の上に施す。内面はハケ後ナデ調整、頸部に指圧痕がみられる。外面はミガキを施す。口径10.8cmを測る。59は外へ開く頸部に凹線紋を施す。内面はナデ調整、外面は粗いミガキを施す。60は頸部に櫛状工具による刻み目列点紋突帯を貼り巡らす。内面は摩滅して調整は不明、外面はナデ調整を施す。61は算盤玉形に張る体部である。内面は上部にナデ調整、下部はタテハケ後ナデ調整、外面はミガキを施す。

壺 62は口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部は内側へつまみ出されている。内外面ともに摩滅して調整は不明。口径19.6cmを測る。

高杯 63は肥厚した裾端部を上下方向につまみ出し、強いヨコナデによって端面は窪む。内面は不定方向のナデ調整を施す。64は柱状部が内傾し、裾部は弧を描き端部は強く斜め上方へつまみ上げ幅広の端面をもつ。端面には2条の凹線紋を巡らす。裾部内面はナデ調整を施すが、外面は摩滅して調整は不明。全て山城Ⅳ-2様式である。

SH05 (第85図65・66)

壺 65は体部がやや内湾しながら、ほぼ垂直に立ち上がる。口縁部は外反すると思われる。頸部は内外面ともにヨコナデ調整、体部は内面にナデ調整、外面は上部タタキ後ナデ調整、下部縦方向の板ナデ調整を施す。

高杯 66の杯底部は円盤充填法である。脚部内面はナデ調整、外面は縦方向のミガキを施す。以上2点は山城Ⅳ-2様式である。

SH04 (第85図67)

高杯脚部である。裾部の器壁は肉厚で端面をもつ。裾部端面に2条の凹線紋を巡らす。内面はナデ調整、外面は裾部にミガキ、端面ヨコナデ調整を施す。山城Ⅳ-2様式である。

SK1356 (第88図68~72)

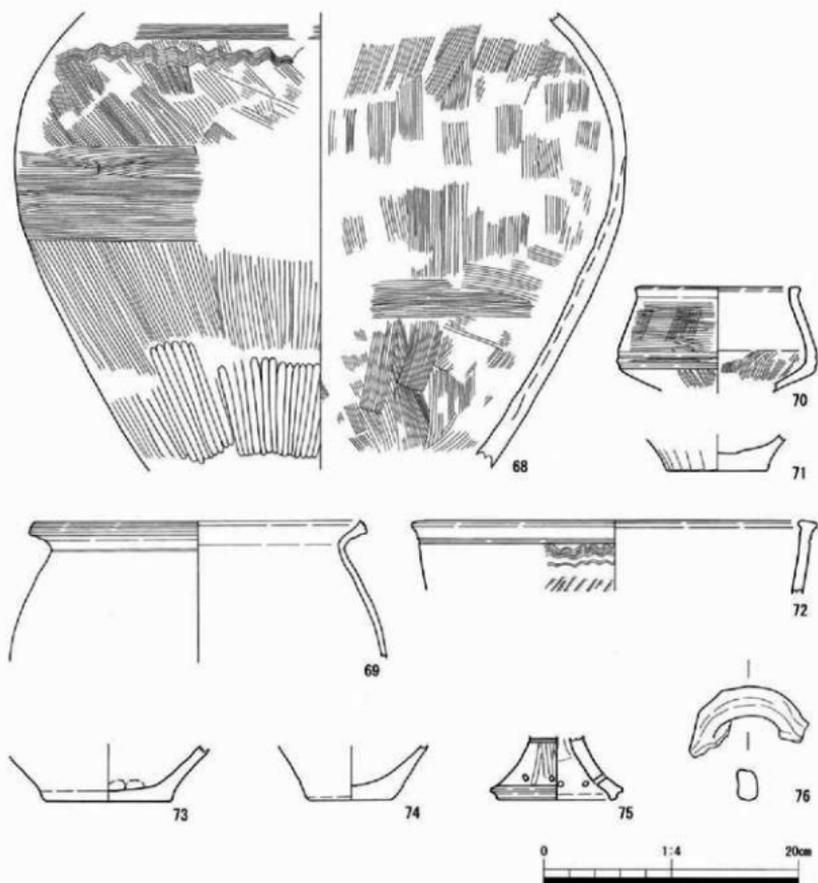
壺 68は大形のものである。肩部に櫛描き直線紋と波状紋を巡らす。内面はハケ調整、外面の体部はハケ、胴部の一部に丁寧な横方向のミガキ、下半部はヘラケズリを施している。

壺 69は口縁部が「く」の字状に緩やかに外反し、肥厚した端部を上方へつまみ上げ尖り気味である。口縁部端面に3条の凹線紋を巡らす。内外面ともに摩滅して調整は不明。口径25.6cmを測る。

台付鉢 70の口縁部は緩やかに外反し上端面をもつ。体部は下半部で屈曲し内傾しながら



第87図 SK1356出土遺物



1トレンチ SKI356:壺(68)、甕(69)、鉢(70-72)、底部(71) SKI352:底部(73) Pit1285:底部(74)
 2トレンチ Pit2426:高杯(75) C-9:水丞把手(76)

第88図 遺物実測図(6)

立ち上がる。深い椀状の杯部を呈する。体部の屈曲部に2条の凹線紋を巡らす。内面の口縁部～体部中位にかけてヨコナデ調整、下半部はハケ調整、外面の口縁部はヨコナデ調整、体部はハケメ後ヘラミガキを施す。口径12.0cmを測る。

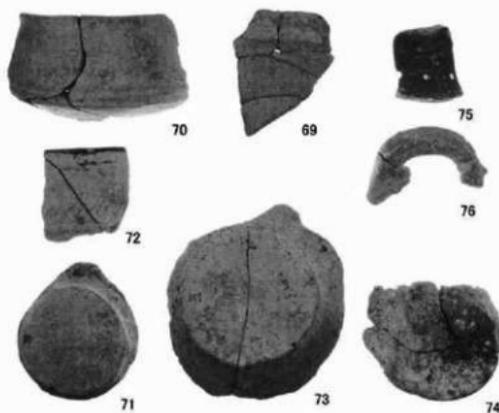
底部 71は底部からやや外傾する立ち上がり部をもち、体部は緩やかに拡がり、内面は指オサエ、外面は緊き目を板ナデ調整、底部はナデ調整を施す。底径7.8cmを測る。

鉢 72は口縁部の断面が「T」字状を呈し、ほぼ垂直に立ち上がる体部に1条の凹線紋を、すぐ下に櫛描き波状紋を巡らし、さらにその下位に櫛状工具による刺突紋を施す。内

面はヨコナデ調整を施すが、
外面は摩滅して調整は不明。
口径29.6cmを測る。全て山城
Ⅳ-2様式である。

SK1352 (第88図73)

底部からはほぼ垂直な立ち上
がり部をもち、体部は大きく
拡がる。底部は平坦である。
内面は指オサエ後ナデ調整、
外面は底部にナデ調整を施す
が、体部は摩滅して調整は不
明。底径9.8cmを測る。山城
Ⅳ-2様式である。



第89図 SK1356他出土遺物

Pit1285 (第88図74)

体部が底部から緩やかに拡
がり、底部は平坦である。内面はナデ調整を施すが、外面は摩滅して調整は不明。底径
6.3cmを測る。山城Ⅳ-2様式である。

Pit2426 (第88図75)

高杯脚部である。裾部端面を斜め下方向につまみ出し丸く収める。器壁は全体的に厚手
である。裾部には約0.5cmの孔を外側から開けている。裾部端面には1条の凹線紋を巡ら
す。内面はヨコナデ調整、外面は端面にヨコナデ調整、裾部はミガキを施す。山城Ⅳ-2
様式である。

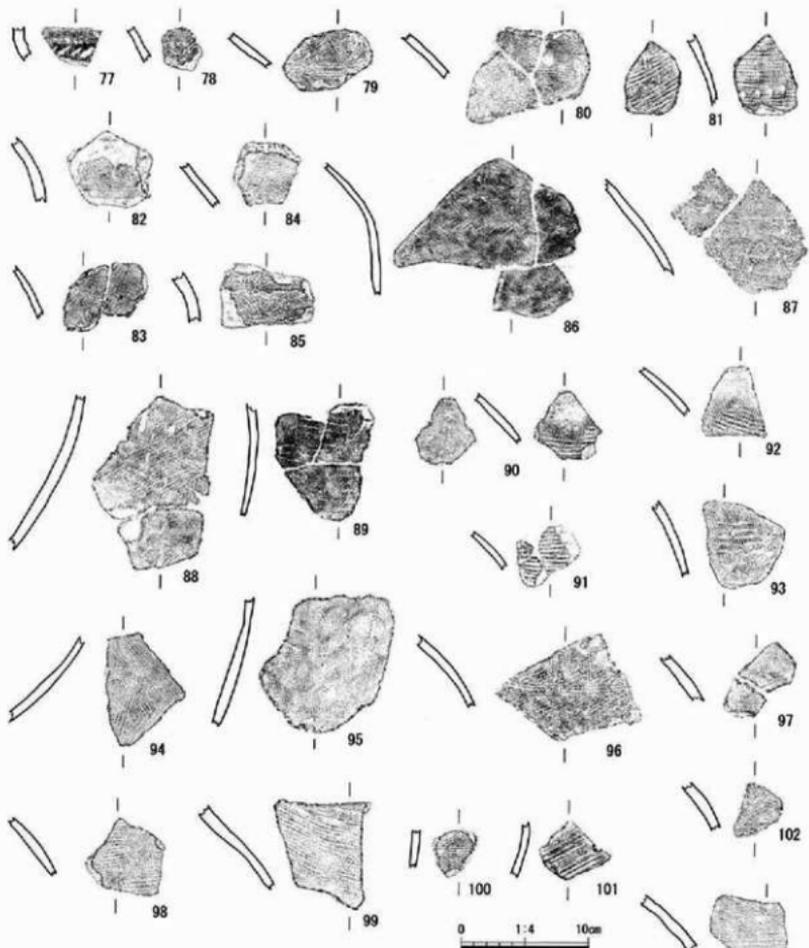
2 トレンチC-9 (第88図76)

水差しの把手の完形である。断面の形は歪な長方形を呈し、全体にナデ調整を施す。最
大長9.4cmを測る。

拓本 (第90図77~103)

SH01 (77~93) 77は壺の頸部片である。頸部外面に櫛状工具による刻み目紋を施す。
内面はハケ調整、外面はヨコナデ調整を施す。78~87は壺体部の上部片である。79は上部
に斜格子紋、すぐ下に櫛描き直線紋を加飾する。78・80~84・87は櫛描き直線紋と波状紋
を加飾する。85・86は櫛描き波状紋を加飾する。88は壺の体部片である。内面はナデ調
整、外面は粗いミガキとケズリを施す。89~93は壺の体部片である。外面はタタキ後ハケ
調整を施す。91は内面にナデ調整を施し、外面にはタタキ目が残る。

1 トレンチ土器群 (94) 壺体部片である。内面はヨコナデ調整、外面はハケメ調整を
施す。

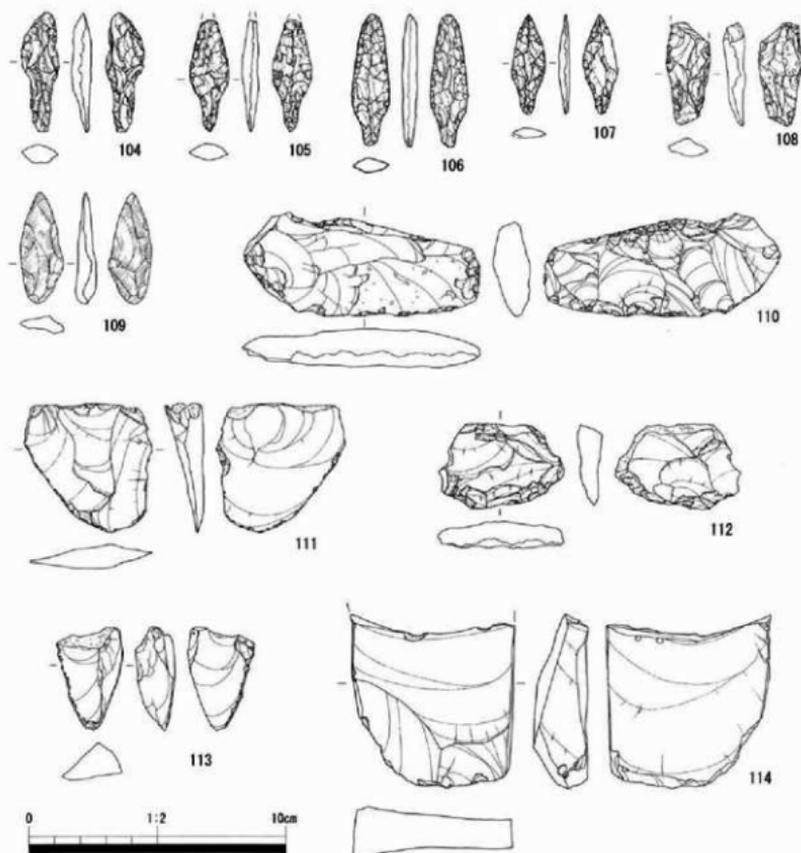


1-レンチ SH01: 壺(77~88)、甕(89~93) 土器群: 壺(94) Pit1389: 壺(95)
 SK1356: 壺(96・97)、SK1377: 壺(98)、甕(99) Pit1540: 壺(100)、甕(101)
 包含層: 壺(102・103)

第90図 遺物実測図(7)

Pit1389 (95) 壺体部片である。内面は摩滅して調整は不明、外面はタテハケ調整を施す。

SK1356 (96・97) 壺体部片である。96は櫛描き直線紋と列点紋を交互に加飾する。列点紋を施した後、縦方向の櫛描き直線紋を巡らす。97は櫛描き直線紋と波状紋を加飾する。



1トレンチ SH01:石鏝(105) Pit1436:石鏝(106) 表採:石鏝(107)、スクレイパー(112) E-1包含層:スクレイパー(113)
 2トレンチ SH10:石鏝(104)、スクレイパー(110) SH09:石鏝(108・109) B-9包含層:スクレイパー(111) SH17:コア(114)

第91図 遺物実測図(8)

肩部外面にナデ調整を施す。

SK1377 (98・99) 98は壺の体部片である。櫛描き直線紋と波状紋を交互に加飾する。内面はヨコナデ調整、外面はタタキを施す。99は甕の体部片である。内面はナデ調整を施し、外面にタタキ目が残る。

Pit1540 (100・101) 100は壺の体部片である。櫛描き直線紋を加飾する。内面はハケメ調整を施す。101は甕の体部片である。外面にタタキ目が残る。

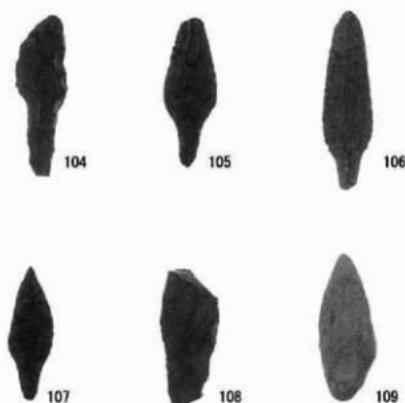
包含層(102・103) ともに壺の体部片である。櫛描き直線紋と波状紋を加飾する。

2) 石製品・鉄製品

石鏃は6点、スクレイパー4点、コア1点、敲石2点、砥石2点、鉄斧1点が出土している。ほとんどが遺構からである。

石器 (第91図104~114 第95図115~118)

打製石鏃 (104~108) 有茎鏃 (104~107) と無茎鏃 (108) が出土している。104の表面は細かな調整加工を、裏面は粗い調整加工を施している。鏃の可能性も考えられる。法量は長さ4.6cm、幅1.4cm、厚さ0.7cmである。SH10から出土。105の左側縁は細かな調整加工だが、全体に粗い調整加工を施している。鏃身の先端は欠損。法量は長さ4.4cm、幅1.5cm、厚さ0.6cmを測る。SH01のベッド状遺構の1段さがつた所から出土。106は全体に丁寧な調整加工だが、周縁はさらに細かな調整加工を施している。鏃身は長い。茎部は欠損して長さは不明である。法量は残存長



第92図 出土石器 (1)



第93図 出土石器 (2)

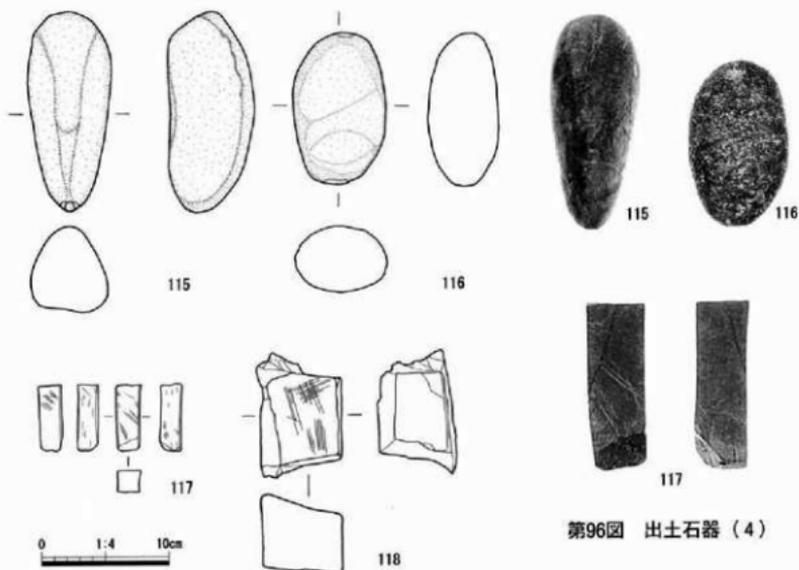
5.1cm、幅1.4cm、厚さ0.55cmである。Pit1436から出土。107は両面の周縁を加工し刃部を作りだしている。茎部は短い。法量は長さ3.9cm、幅1.3cm、厚さ0.4cmである。表採である。108は表面の周縁は丁寧な調整加工を施し、裏面には一部素材面を残す。鏃の可能性も考えられる。法量は長さ4.0cm、幅1.6cm、厚さ0.7cmである。SH09から出土。石材は全てサヌカイトである。

磨製石鏃 (109) 無茎鏃で、石材は砂岩である。断面は三角形を呈する。法量は長さ4.3cm、幅1.6cm、厚さ0.7cm、重さ4gである。SH10の周壁溝から出土。

スクレイパー (110~113) 110の周縁は両面から加工し

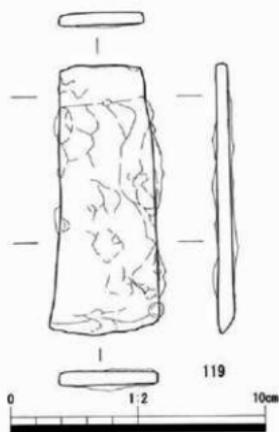


第94図 出土石器 (3)



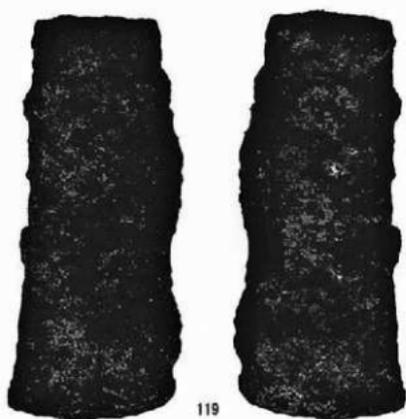
1トレンチ Pit285: 燧石(115) SH01: 燧石(116) E-4包含層: 燧石(118)
2トレンチ SH11: 燧石(117)

第95図 遺物実測図(9)



1トレンチ SH01: 鉄斧(119)

第97図 遺物実測図(10)



第98図 板状鉄斧

て、刃部を作り出している。断面の形は楕円形を呈し、石材はサヌカイトである。法量は長さ9.2cm、幅3.6cm、厚さ1.4cmである。SH10の周壁溝から出土。111は下半部の周縁を両面から加工し、刃部を作り出している。刃部は使用した形跡がみうけられる。断面の形は菱形を呈する。法量は長さ5cm、幅4.8cm、厚さ6.9cmである。2トレンチB-9包含層から出土。112は下半部を両面から加工し、刃部を作り出しているが未製品と思われる。断面の形は三角形を呈する。石材はサヌカイトである。法量は長さ3.1cm、幅4.9cm、厚さ1.05cmである。表採である。113は左側縁部を両面から加工し刃部を作り出し、使用した形跡がみうけられる。断面の形は三角形を呈し、石材は長石と思われる。法量は長さ4.0cm、幅2.3cm、厚さ1.4cmである。1トレンチE-1包含層から出土。

コア(114) 表面に剥離痕がみられる。断面の形は長方形を呈する。石材はサヌカイトである。法量は長さ6.7cm、幅6.18cm、厚さ2.0cmである。SH17の周壁溝から出土。

敲石(115・116) 115は平面の形が棒状を呈し、下端部に敲打痕がみられる。法量は長さ15.5cm、幅6.6cm、厚さ6.6cmである。Pit1285から出土。116は平面・断面の形ともに楕円形を呈する。上下両端部に敲打痕がみられる。法量は長さ12.0cm、幅7.3cm、厚さ5.5cmである。SH01から出土。

砥石(117・118) 117は柱状石斧の折れた柱状部を砥石として転用したと思われる。石材は緑泥凝灰岩である。法量は残存長5.2cm、幅2.0cm、厚さ1.7cmである。SH11内炭ピット(SK2071・2072)から出土。118は1面だけ使用痕がある。石材はヘンマ岩である。上下は欠損しているため、全体は分からない。E-4包含層から出土。

鉄斧(第97図119)

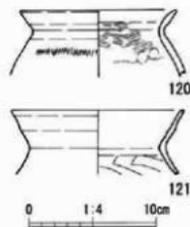
完形の板状片刃鉄斧である。平面の形はヘラのような形で、断面の形は長方形を呈する。法量は長さ10.5cm、刃部幅4.2cm、厚さ0.4cm、重さ120gである。SH01の上層から出土。

2 庄内期以降の遺物

庄内・布留期(第100図120・121)



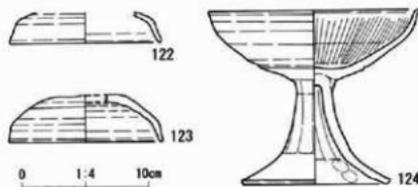
第99図 庄内・布留期の遺物



2トレンチ SH12:庄内式土器甕(120)
1トレンチ Pit1540:布留式土器甕(121)

第100図 遺物実測図(11)

120庄内式土器甕である。肥厚した口縁部は外傾し、端部はつまみ上げて尖る。体部外面に縦方向の板ナデ調整を施した後、粗雑な爪形紋を施す。内面は指オサエ後ハケメ調整、外面は口縁部にヨコナデ調整を施す。口径12.2cmを測る。SH12から出土。121布留式



トレンチ SK1316:杯蓋(122) 包含層:杯蓋(123)
SK1314:高杯(124)

第101図 遺物実測図 (12)

土器甕である。口縁部は斜め上方へ真っ直ぐのび、端部はつまみ上げて尖る。器壁は薄手である。体部内面はヘラケズリを施し、外面は摩滅して調整は不明。口径13.4cmを測る。SB05のPit1540から出土。

古墳後期 (第101図122・123)

122・123須恵器杯蓋である。122の天井部はほとんど欠損している。口縁部は外反し端部は丸い。内外面ともにヨコナデ調整を施す。口径12.0cmを測る。SK1316から出土。123の天井部は丸く、口縁部に向かって緩やかに開き端部は丸い。内面はヨコナデ調整、外面は天井部に回転ヘラケズリ、口縁部はヨコナデ調整を施す。口径12.1cmを測る。包含層から出土した。以上2点はTK209に併行すると思われる。

124土師器高杯である。口縁部が外反し、端部は外へつまみ出され尖り気味である。脚部は柱状部から裾部に向かって「ハ」の字状に拡がり、柱状部の器壁は厚手である。内面は口縁部にヨコナデ調整、杯部にミガキ、柱状部はヘラケズリ、裾部は指オサエ、外面は口縁部～杯部にかけてヨコナデ調整、脚部はナデ調整を



第102図 須恵器杯蓋



第103図 土師器高杯

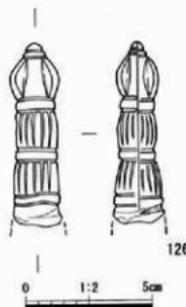


トレンチ SX1400:伏見人形(125・126)

第104図 遺物実測図 (13)



125



126

第105図

SX1400出土遺物

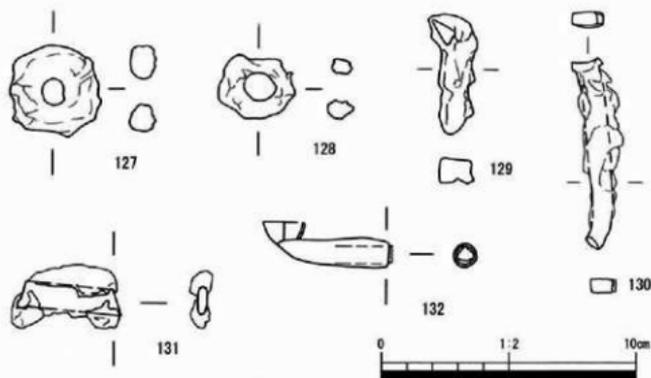
施す。口径16.6cm、器高13.9cmを測る。SK1314から出土。7世紀初め頃と思われる。

近世 (第104図125・126)

125は伏見人形の馬である。鞍や鍔など細かく表現されている。顔が欠損しているが、胴体は完存し、後ろ脚の裏には穴が途中まで開いている。残存高3.35cmを測る。126は伏見人形の五拵杵である。全体的に磨滅しているが、握るところの模様は蓮弁飾と紐と思われる。合わせ目は上下にズレ、下半部は欠損しているため不明である。残存長7.3cmを測る。以上2点はSX1400から出土。

金属製品 (第106図127~132・第107図133)

127・128は円環である。用途や年代は不明である。127法量は直径3.4cm、幅1cm、重さ16gである。128法量は直径3cm、幅0.8cm、重さ8gである。129・130は釘である。129の残存長4.5cm、130は7.5cmである。131は不明製品である。両端は欠損している。法量は残存長4.0cm、幅1.1cm、厚さ0.4cmである。132は煙管の雁首である。筒にはラオが残る。火皿部の口径1.6cm、筒の残存口径1.0cmを測る。133は「寛永通宝」である。



1トレンチ 包含層：円環(128)、釘(129)、不明(131)、煙管(132)
2トレンチ 包含層：円環(127)、釘(130)

第106図 遺物実測図 (14)



第107図 銭貨拓影

註) 本遺跡の弥生土器の編年の位置づけには、森岡秀人氏の「山城地域」(寺沢 薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社1990年)の編年を参考にした。

5. まとめ

今回の調査では、弥生時代中期後半を中心に、庄内期・古墳時代前期・古墳時代後期などの集落に関係する遺構・遺物が複雑に重なり合った状態で発見された。集落としては南端部分にあたり、さらに北側に広がっていることが予想される。各時期ごとに気づいたことをまとめてみたい。

1) 弥生時代中期

立地としては、木津川沿いの平地部からはやや奥まった、比高差20～25mの低い丘陵上にあるが、眺望は良くない。住居跡として検出できたのは16棟であるが、遺構の切りあいから同時に建てられていたのは調査範囲内では3～4棟と考えられる。倉庫と考えられる建物跡もあわせて確認された。興味深いことは、住居跡の平面形であり、通常近畿地方では中期後半の時期には円形であるが、方形（長方形）の住居が多数を占めることである。切りあい関係からA群は方形が4棟続き、B群は円形→方形→方形、C群は方形→円形→円形→方形の変遷がわかる。また、住居の重なりが多いことも注意されよう。

石畿が数点出土しているが、いずれも有茎の柳葉状のものであり、狩猟用のみのものにしてはやや大型であり、住居跡から石畿を製作すると考えられるコアも出土している。何らかの緊張が始まりかけていたのではないかと考えられる。

土器をみていくと在地のものがほとんどであるが、若干数他地域との交流がうかがえる。ではどの地方の影響を受けているのであろうか。山城地域全体では近江の影響があるのは周知の事実であるがこの他にもいくつか考えられる。まず、伊賀・伊勢湾方面である。木津川を遡るルートによって容易にたどり着くことができる。三重県津市の長遺跡や鈴鹿市の境谷遺跡などでは当遺跡とほぼ同時期の高地性集落が調査され、長方形縦穴住居跡が多数発見されていて、この形態の特徴から何らかのつながりがあると考えてみた。しかし、出土遺物の上からは明確に伊勢湾系のもので判別できるものは出土していない。次に瀬戸内系では兵庫県西脇市の野村構居遺跡下層からも同様の住居跡が調査されている。遺物の面においても生駒西麓産とみられるものがあることや、遺物の形態的特徴が全体的に瀬戸内方面に近いと多くの方々からの指摘もあり、木津川・淀川を下ることによって容易に行き来することが可能である。瀬戸内方面との交流が優位であったように感じられる。最後に地理的にも一番関わりがありそうな大和地方であるが、遺物の上からでは関係がうかがわれないものは見られなかった。

鉄器で板状鉄斧が出土したことも注目されよう。

この集落は調査地だけを見ていく限りでは、中期後半の後期に近い時期の一定期間に存在し、不自然なように住居跡からの出土遺物が少なく、またSH01のように量を多く出土したものについても床面からの出土は見られず、ある程度埋まった段階の沈み込みで廃棄して他の場所へと移り住んだような印象が持たれる。移住した先は現時点では明確な場所

を特定することはかなわない。候補地としては田辺天神山遺跡が挙げられようが、よくわからない。

2) 庄内期

縦穴住居跡が1棟みつかった。北側の田辺天神山遺跡にも、明確ではないが当該期の住居と考えられるものがあり、市内で数少ない調査例となろう。

3) 古墳時代前期

布留式土器が柱穴からみつかった掘立柱建物跡である。建物1棟だけの集落は考えにくく、調査地の北側に住居の展開を予想させる。

4) 古墳時代後期

7世紀初めと考えられる土坑3基である。長方形・正方形に近い隅丸方形・円形と不整形ではなく、いずれも整った形のものであり、土坑墓の可能性が考えられたが不明である。

今回の調査はいずれの時期も集落の南端の一部が調査されたにすぎないが、ことに弥生時代中期後半の集落は、方形（長方形）住居が主となるやや特異な集落であることが確認された。市内では、田辺城下層で同時期の円形縦穴住居跡がみられるほか、狼谷遺跡、堀切古墳群下層などの丘陵部でやはり中期後半の土器が多くみつかっている。後期では田辺天神山遺跡、飯岡遺跡、興戸1号墳下層などから縦穴住居跡がみついている。今後とも丘陵部での弥生時代遺跡の存在に留意する必要がある。

【参考文献】

- 田辺町教育委員会「飯岡遺跡第4次発掘調査概報」(田辺町埋蔵文化財調査報告書 第16集)1993年
- 鈴鹿市考古博物館「境谷遺跡第1次発掘調査概要報告」2007年
- 鈴鹿市考古博物館「境谷遺跡第2次発掘調査概要報告」2008年
- 三重県埋蔵文化財センター「一般国道23号中勢地区(9工区)建設事業に伴う長遺跡発掘調査報告」(三重県埋蔵文化財調査報告 115-9)2000年
- 西脇市教育委員会(西脇市郷土資料館)「野村橋居遺跡Ⅱ」(西脇市文化財調査報告書 6)1997年
- 田辺町教育委員会・田辺町文化財保護委員会「三山木弥生式遺跡発掘調査報告」1968年
- 同志社大学文学部文化学科考古学研究室「田辺天神山弥生遺跡」(同志社大学文学部考古学調査記録 第5号)1976年
- 京田辺市教育委員会「二又遺跡・三山遺跡発掘調査概報-三山木地区特定土地地区画整理事業地内の調査-」(京田辺市埋蔵文化財調査報告書 第28集)1999年
- 京都府京都文化博物館「内里八丁遺跡 第二京阪道路建設に伴う京都府八幡市所在遺跡の調査」(京都文化博物館調査研究報告 第13集)1998年
- ①京都府埋蔵文化財調査研究センター「三山木遺跡第2次発掘調査概要」(「京都府遺跡調査概報」第92冊)2000年
- ②京都府埋蔵文化財調査研究センター「三山木遺跡第3次発掘調査概要」(「京都府遺跡調査概報」第98冊)2001年
- ③京都府埋蔵文化財調査研究センター「三山木遺跡第4次発掘調査概要」(「京都府遺跡調査概報」第103冊)2002年
- ④京都府埋蔵文化財調査研究センター「三山木地区区画整理事業関係遺跡」(「京都府遺跡調査概報」第106冊)2003年
- ⑤京都府埋蔵文化財調査研究センター「木津城山遺跡」(京都府遺跡調査報告書 第32冊)2003年
- 近江八幡市教育委員会「近江八幡市埋蔵文化財発掘調査報告XⅦ」1988年
- ⑥京都府埋蔵文化財調査研究センター「京都府弥生土器集成」1989年

南山遺跡出土板状鉄斧の自然科学的調査

塚本敏夫・山岡奈美枝

大澤正己・鈴木瑞穂

中村俊夫、山田哲也

1. はじめに

南山遺跡は京田辺市三山木越前に所在する。発掘調査地区からは、弥生時代中期の竪穴住居跡16棟等が検出された。住居跡の平面プランが円形のものから方形のものへと変化していく過程がわかる貴重な遺跡であり、弥生中期に方形の住居を中心とした集落は三重県の伊勢湾西岸に多いことから、何らかの交流があった可能性が指摘されている。

出土遺物は弥生時代中期の土器類や石鏃などの石器のほか、縦穴住居跡SH01の弥生時代中期の土器が集中する層から、板状鉄斧が1点出土して注目されている。

今回この板状鉄斧の保存処理を行う機会を得た。そこで保存処理に先立ち自然科学的調査を行うことになった。ここでは鉄原料や製作技術の把握から産地同定や生産形態・流通の問題を検討する基礎資料を得る目的から金属学的調査を行い、製作年代を知る目的から鉄の放射性炭素 (^{14}C) 年代測定を行ったのでその結果を報告する。

調査の分担は、遺物の保存処理及び試料採取を山岡奈美枝が、金属学的調査を大澤正己、鈴木瑞穂が、鉄の放射性炭素 (^{14}C) 年代測定を中村俊夫、山田哲也が行い、全体のとりまとめを塚本敏夫が行った。

2. 分析試料のサンプリング

板状鉄斧1点の調査を行った。供試体のサンプリングは刃部のX線写真およびメタルチェッカーの調査でメタルの残存量が多い箇所から小型グラインダー等を用いて切り出した。1/3を金属学的調査に2/3を鉄の放射性炭素 (^{14}C) 年代測定の実験試料とした。分析試料のサンプリング箇所をPhoto. 1 上段に示す。

3. 金属学的調査

3-1. 調査項目

(1) 肉眼観察

遺物の外観上の所見を記載した。

(2) マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は、顕微鏡検査によるよりも広い範囲にわたって、組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

(3) 顕微鏡組織

金属鉄部の組織観察、鉄中非金属介在物の調査などを目的とする。

光学顕微鏡を用い観察を実施した。観察面は供試材を切り出した後、エメリー研磨紙の #150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の 3μ と 1μ で順を追って研磨している。また腐食(Etching)液には3%ナイトル(硝酸アルコール液)を用いた。

(4) ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計(Vickers Hardness Tester)を用いて、金属鉄部の硬さ測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に 136° の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

(5) EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

鉄中非金属介在物の組成調査を目的とする。

試料面(顕微鏡試料併用)に真空中で電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

反射電子像(COMP)は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される個所ほど明るく、軽い元素で構成される個所ほど暗い色調で示される。これを利用して、各相の組成の違いを確認後、定量分析を実施している。また元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加え、特性X線像の撮影も適宜行った。

3-2. 調査結果

(1) 肉眼観察：僅かに刃部側が幅広の板状鉄斧である。表面は全体が黄褐色の土砂で覆われるが、特殊金属探知機のL(●)で、広範囲に反応があるため、内部には良好に金属鉄が残存するものと推定される。また刃先先端(外観写真上面側)に稜があり、片刃の鉄斧の可能性が高いと考えられる。この刃先中央部分から、顕微鏡観察用試料を切り出して、切断面の調査を実施した。

(2) マクロ組織：Photo.1①に示す。刃部先端(写真左側)まで、金属鉄が良好に残存している。また金属鉄部は3%ナイトルで腐食したところ、炭素含有量の多寡に伴い細かい層状が確認された。これは多数回折り返し鍛錬を施した鍛造製品の特徴といえる。

(3) 顕微鏡組織：Photo.1②~④、Photo.2①~⑤に示す。Photo.1②~④は刃先(マクロ写真左側)の拡大である。白色針状のフェライト(Ferrite：a鉄)、黒色層状の微細パーライト(Pearlite)、淡褐色針状のマルテンサイト(Martensite)が確認される。

一方Photo.2①~⑤は顕微鏡試料基部(マクロ写真右側)の拡大である。粗大化した不定形のフェライト結晶が並ぶ個所と、黒色層状のパーライト主体の個所が互層をなしている。

この金属組織から、当鉄斧は700℃前後まで緩やかに冷却した後、刃先に水焼き入れを

施したものと推測される。

(4) ビッカース断面硬度: 刃先 (Photo. 1 ②) と基部側 (Photo. 2 ①) の硬度を測定した。刃先上側 (低炭素量域) の硬度値は179~260Hvとやや軟質であった。一方下側 (高炭素域) は219Hv~353Hvとより硬質で、水焼き入れの効果が現れている。

また基部側は、白色部 (フェライト粗大粒) の硬度値は117~161Hvであった。通常のフェライト結晶より全体に硬質であるため、燐 (P) などの硬度を上昇される元素を微量固溶している可能性が考えられる。また黒色部 (針状フェライト・パーライト組織) の硬度値150~190Hvであった。組織に見合った値といえる。

以上の硬度測定結果から、当鉄斧は0.2~0.5%程度の炭素含有量のばらつきがあるものと推定される。

(5) EPMA調査: Photo. 3 ①に大型展伸状の非金属介在物の反射電子像 (COMP) を示す。分析点19の暗色部の定量分析値は59.9% FeO-31.4% SiO₂であった。ファヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO₂) に同定される。20の白色粒状結晶の定量分析値は96.7% FeOであった。ウスタイト (Wustite: FeO) に同定される。また金属鉄部分の定量分析値は22が101.9% Fe、23は98.4Fe-4.5% Oであった。燐 (P) はごく微量 (0.012~0.470% P₂O₃) 含まれるが、遺跡出土製品としては高いものではない。

もう1視野、Photo. 3 ②に大型展伸状の非金属介在物の反射電子像 (COMP) を示す。21の定量分析値は57.9% SiO₂-8.6% Al₂O₃-7.4% CaO-1.4% K₂O-20.3% FeOであった。非晶質珪酸塩で鉄分 (FeO) をかなり固溶する。24の金属鉄部の定量分析値は102.0% Feであった。ここでも燐 (P) の影響はほとんどみられない。

当鉄斧中の大型非金属介在物は、鍛錬鍛冶と同様のウスタイト (Wustite: FeO)・ファヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO₂) 組成か、非晶質珪酸塩 (SiO₂主成分でFeOもかなり含まれる) であった。これらは鍛冶作業の際、鉄素材の吹減り (酸化に伴う損失) 防止のため表面に塗布された粘土汁や、鍛接剤 (粘土汁・薬灰) の溶融物と鉄材表面が反応して生じたものと推定される。

3-3. 考察

弥生時代中期に推定される南山遺跡出土板状鉄斧は、刃先の断面金属組織を調査した結果、炭素含有量が0.2~0.5%程度のばらつきのある鉄材で、折り返し鍛錬を繰り返し行った後、水焼き入れを施して刃先を硬化したことが明らかとなった。

板状鉄斧の使用に適した熱間での鍛打加工、および熱処理技術のもとで製作された製品といえよう。

またEPMA調査の結果、鉄中非金属介在物は、熱間での鍛冶加工に伴い生じたものであることが確認された。明らかに製鉄原料起源と判断できる非金属介在物はなく、産地同定に繋がる始発原料の性状を検討することは困難であった。

ただし以下の事は発言できよう。板状鉄斧は低温還元直接製鋼法にもとづく塊錬鉄由来

の可能性が高い。材質はフェライト結晶粒の粗大化傾向はあるものの、高温沸し繰返し曲げ鍛接からの素材を焼入れ技術の駆使したところをみると高度の鍛冶技術の産物と評価できる。弥生時代中期の日本列島内の鍛冶の実体を俯瞰すると、例えば京都府奈良具岡遺跡や春日市赤井手遺跡、更には弥生時代後期で八女市西山ノ上遺跡などでは、海外に依存した板・棒状半製品（鑄鉄脱炭鋼）を原料として、火炙り鑿切り・砥石研磨の原始鍛冶であり、沸し鍛接に必要な羽口や鉄滓を伴っていないところに大きな特徴をもつ^{1) 2)}。

板状鉄斧の産地は、介在物組成など不明瞭ながら大陸側に求めるべきであろう。産地同定は共伴遺物や今後の大陸側の調査事例を参考に考察すべきと考える。

注

1) ①大澤正己2008「マクロ・ミクロの世界が捉えた弥生の鉄～可鍛鑄鉄・鑄鉄脱炭鋼を中心に」『第18回フォーラム講演会「弥生時代の鉄文化—(1)—～理系から見た鉄関連遺物の諸問題～』予稿集(社)日本鉄鋼協会社会鉄鋼工学会

2) ②大澤正己2008「九州の鉄生産遺跡」『九州地域の古代から近代の製鉄技術発達史』(社会鉄鋼工学会2008年度秋季講演大会シンポジウム論文集)社団法人日本鉄鋼協会

4. 放射性炭素年代測定

4-1. 測定方法

鉄試料の調整とグラファイトの合成は、名古屋大学年代測定総合研究センターにおいて行い、年代測定は名古屋大学年代測定総合研究センターに設置されているタンデトロン加速器質量分析計2号機(オランダのHVEE社製のタンデトロンAMS)で放射性炭素(¹⁴C)年代測定を実施した。

名古屋大学年代測定総合研究センターのタンデトロン2号機では、¹⁴Cと¹²Cの存在比(¹⁴C/¹²C比(=R))が未知試料(R_{sample})と¹⁴C濃度が既知の標準体(R_{AD1950})とについて測定され、R_{sample}/R_{AD1950}比が得られる。また、¹³C/¹²C比も同時に測定できる。測定されたR_{sample}/R_{AD1950}比について、タンデトロン2号機で測定された $\delta^{13}\text{C}$ を用いて炭素同位体分別の補正を行ったのち、試料の¹⁴C年代値(同位体分別補正¹⁴C年代)を算出した。¹⁴Cの半減期としては、国際的な慣例に従って、Libbyの半減期5568年を用いた。¹⁴C年代値は、西暦1950年から遡った年数として与えられる。

また、得られた同位体分別補正¹⁴C年代を¹⁴C年代-暦年代校正データセット(IntCal09, Reimer et al. 2009)および校正プログラムCALIB Rev.6(M. Stuiver, P. J. Reimer, and R. Reimer, 2009)を用いて暦年代に換算した。¹⁴C年代値[yr BP]に対応する年代値の誤差はone sigma ($\pm 1\sigma$: 1標準偏差)及びtwo sigma ($\pm 2\sigma$: 2標準偏差)で示した。

4-2. 測定結果

¹⁴C年代測定結果をTable. 1に示した。板状鉄斧の¹⁴C年代は、2116 \pm 23 BPと測定された。

これを¹⁴C年代-暦年代較正データセット (IntCal09) を用いて較正すると較正年代は、2標準偏差 (two sigma) の範囲で、BC 2 世紀末~BC 1 世紀中頃を示した。

Table. 1 板状鉄斧の¹⁴C年代と較正年代

試料の 名称	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (permil) * by AMS	¹⁴ C age (BP)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代 (Stuiver et al. 2009) **		測定番号 (NUTA 2-)
			$\pm 1 \sigma$ の暦年代範囲 (probability)	$\pm 2 \sigma$ の暦年代範囲 (probability)	
板状鉄斧	-22.1 ± 1	2116 ± 23	Cal BC 185 - 106 (100.0%)	Cal BC 201 - 84 (90.6%) Cal BC 80 - 54 (9.4%)	15005

*) $\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ は次式で定義される。

$$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}} (\text{‰}) = [(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{sample}} / (^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{PDB}} - 1.0] \times 1000$$

ここで、(¹³C/¹²C) sampleは試料の¹³C/¹²C比、(¹³C/¹²C) PDBはPeed de belemnite標準物質 (炭酸カルシウム) の¹³C/¹²C比である。

注意事項

- 1) ¹⁴C年代値はBPの単位で、西暦1950年から過去へ遡った年代値で示される。
¹⁴Cの半減期として、国際的に用いられているLibbyの半減期5,568年を用いて¹⁴C年代値を算出した。
- 2) *) $\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ を用いて炭素同位体分別の補正を行った。すなわち、Conventional ¹⁴C age (同位体分別補正¹⁴C年代) である。
- 3) **) ¹⁴C年代値から暦年代への較正は、樹木年輪についての¹⁴C濃度測定から得られた較正データを用いる。ここでは、IntCal09 較正データ (Reimer et al. 2009, Radiocarbon, 51, p. 1111 - 1150) と較正プログラムCALIB Rev 6 (M. Stuiver, P. J. Reimer, and R. Reimer, 2009) を用いて較正を行った。
- 4) **) 暦年代は、¹⁴C年代値が、¹⁴C年代値-暦年代較正曲線で真の年代が入る可能性が高い暦年代範囲で示される。また、真の年代が、表示されたすべての範囲のどれかに入る確率が68% ($\pm 1 \sigma$) と95% ($\pm 2 \sigma$) である。年代範囲の後に示された確率は、68% ($\pm 1 \sigma$) と95% ($\pm 2 \sigma$) のうちで、さらに特定の年代範囲に入る確率を示す。
- 5) 金属鉄の年代測定を行うことは、鉄生産に用いられた木炭の年代測定を行っているため、その木炭となる樹木が1年に1年輪づつ年輪を形成し、それぞれの年輪が炭素循環において大気に対して閉鎖形を形成した年代を示すため、樹木の最外郭の最終年輪と芯材部分の年輪では、年代値に樹齡分だけのずれが生じ、実際に木炭として利用された時期より古い¹⁴C年代が得られるという、“old wood effect”の影響を考慮する必要がある。

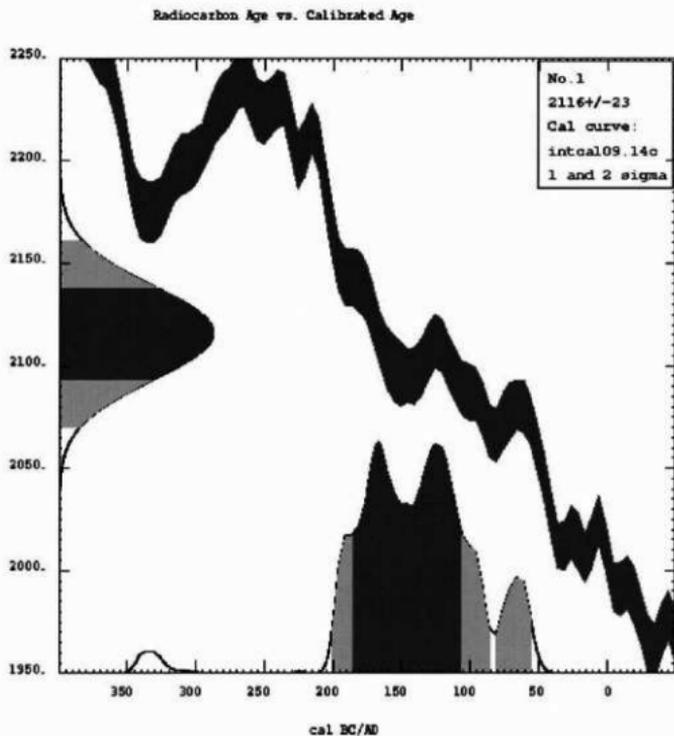


Fig.1 板状鉄斧の暦年代校正結果

参考文献

Libby, W. F. (1955) Radiocarbon dating. *Chicago University Press*, pp.175.

中村俊夫 2001「放射性炭素年代測定と高精度化」『第4紀研究』40(6) 445-459

Kitagawa, H., Masuzawa, T., Nakamura, T., and Matsumoto, E. 1993「A batch preparation method of graphite targets with low background for AMS ^{14}C measurements」『Radiocarbon』35 295-300

PJ Reimer et al. 2009「IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP」『Radiocarbon』51 1111-1150

NAN-1

板状鉄斧

ナイタルetch

①マクロ組織

②～④先端寄り拡大

上側：針状フェライト・パーライト、
亜共析組織

下側：針状フェライト・パーライト・
マルテンサイト、

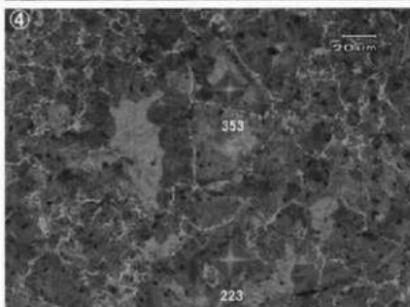
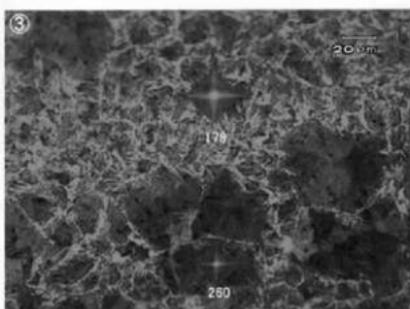
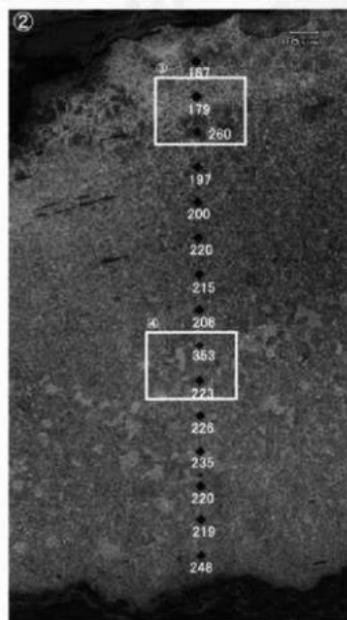
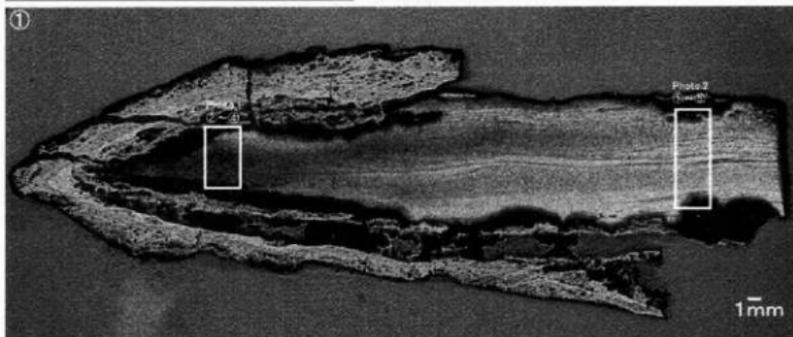


Photo. 1 板状鉄斧の顕微鏡組織

NAN-1
 板状鉄斧
 ナイタルetch
 ①～⑤基部寄り
 フェライト単相～垂共析組織

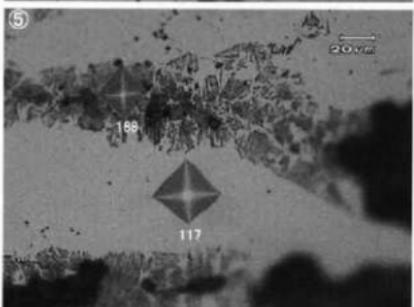
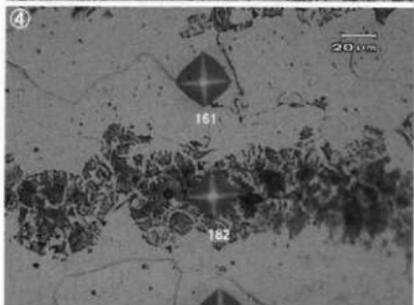
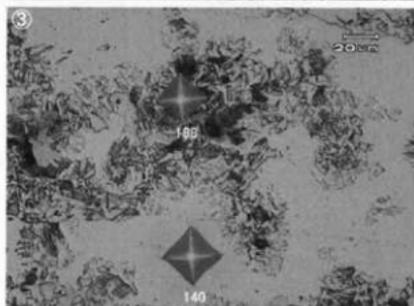
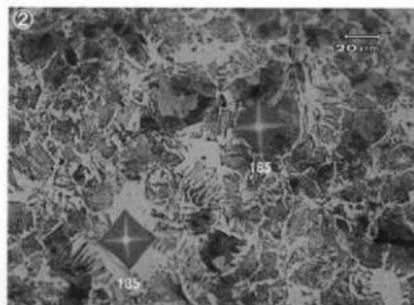
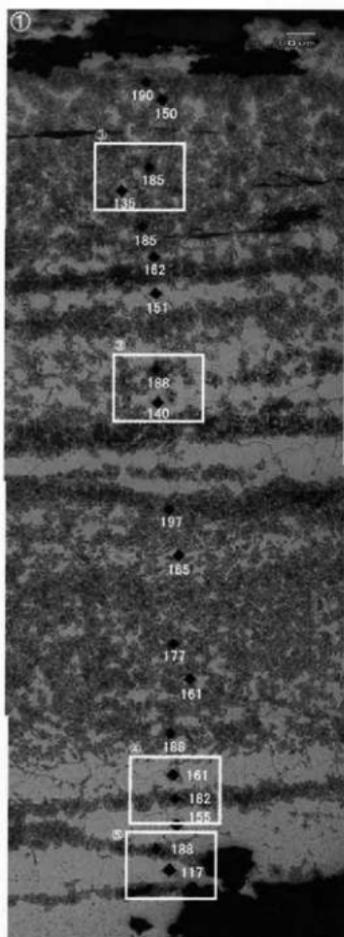
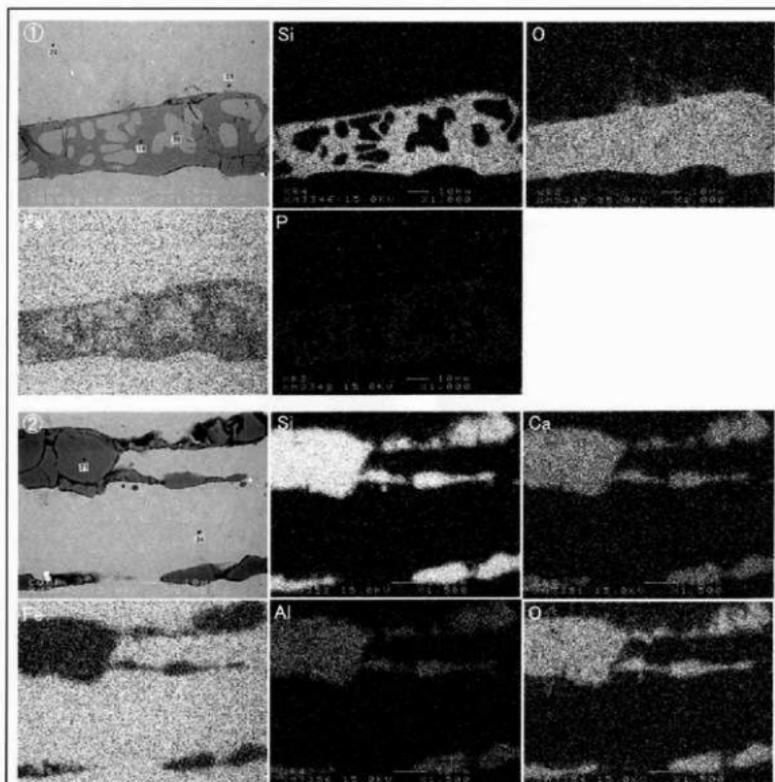


Photo. 2 板状鉄斧の顕微鏡組織



鉄中非金属介在物の反射電子像 (COMP) および特性X線像

定量分析値

Element	19	20	21	Element	22	23	24
F	-	-	-	O	0.068	4.478	0.060
K ₂ O	0.808	-	1.411	S	0.013	0.026	0.013
Na ₂ O	0.227	-	0.482	Sn	-	-	-
CuO	-	0.058	-	Cu	0.047	-	-
MgO	0.181	0.113	0.196	As	0.050	-	0.028
CaO	1.791	-	7.355	P	0.071	0.019	0.035
Al ₂ O ₃	3.940	0.381	8.647	Ti	-	0.053	0.017
FeO	59.880	98.744	20.333	Fe	101.852	98.410	102.032
SiO ₂	31.354	0.232	58.866	V	-	-	0.025
TiO ₂	0.139	0.226	0.660	Mn	-	-	-
S	0.054	-	0.019	Total	102.101	102.987	102.206
MnO	0.111	-	0.921				
As ₂ O ₅	-	-	-				
P ₂ O ₅	0.470	0.049	0.012				
ZrO ₂	0.020	0.190	0.032				
Cr ₂ O ₃	0.009	-	-				
V ₂ O ₅	-	-	-				
Total	98.984	98.053	98.934				

Photo. 3 板状鉄弁のEPMA調査結果

報告書抄録

ふりがな	みなみやまいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	南山遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	京田辺市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第38集							
編著者名	鷹野一太郎・仲道裕・大橋裕子							
編集機関	特定非営利活動法人文化財支援センター							
所在地	〒610-0393 京都府京田辺市田辺80番地							
発行年月日	2010年6月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
南山遺跡	京都府 京田辺市 三山水 越前 9番地ほか	26342		34° 47' 43"	135° 46' 40"	2009年 1月14日 ～ 2009年 5月1日	870㎡	宅地開発
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
南山遺跡	集落跡	弥生時代	縦穴住居跡 掘立柱建物跡		弥生土器・石鏃・板状 鉄斧		低丘陵上に営まれた集落跡を検出。縦穴住居跡17棟、掘立柱建物跡5棟を確認した。	

平成22年（2010年）6月25日印刷

平成22年（2010年）6月30日発行

南山遺跡発掘調査報告書
— 三山木越前地内宅地造成に伴う発掘調査 —
(京田辺市埋蔵文化財調査報告書 第38集)

発行 京田辺市教育委員会

〒610-0393 京都府京田辺市田辺80番地

電話 0774-62-9550

編集 特定非営利活動法人
文化財支援センター

〒611-0041 京都府宇治市樺島町十八9番地

電話 0774-28-6602

印刷 株式会社明新社

〒630-8141 奈良市南京終町3丁目464番地

電話 0742-63-0661